

見て！ 束ちゃんが踊っているよ

かわいいね

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

作品名・見て！ 束ちゃんが踊っているよ

小説ID・251410

原作・インフィニット・ストラatos

みんながろくに宇宙開拓もせずにISで争つてばかりいるので、束ちゃんは踊るのをやめてしまいました
お前のせいです

あ～あ

※なお、あらすじもタイトルもあんまり関係ないし、中身を深く考
えてもいいれない

※2021/3/18 活動休止（打ち切り……？）
…。

目

次

ばんがいへ

番外編『If.』――1

本編

プロローグ

入学式

マツドネスお姉ちゃん

クラス代表決定戦

鈴襲来

幼なじみの野望

【悲報】幼なじみ再集結記念【失敗】

クラス対抗戦

月の兎（前）

月の兎（後）

野望のご褒美

幼なじみと噂話

月曜日の朝

月曜日の午前

ばんがいへ

番外編『I f.』——1

君は病人なのだと人は言う。

幼い頃から様々なことを禁止されて、人と同じように生きることも許されず、無駄に長い時間を布団の中で生きてきた。

体を蝕む熱病の苦しさよりもつらいのは、自分に残された時間を無駄にしながら過ごすこと。ただひたすらに退屈で無益な日々。

自分はこのままつまらない人生の幕を閉じてしまうのだと、一人残された病室の中で幾度となくため息をついたものだ。

でも、それでも自ら終わらせてしまおうと考えることだけはしなかつた。

むしろその逆。ある存在のお陰で、もつと生きてやろうと思えたんだ。

「ゆつきー、おはよ」

「やあ、おはよう。……今日は早かつたね」

「日曜日だもん。学校はお休みなんだよ」

「ああ、そうだっけ。……早くから来てくれたのは嬉しいけど。開けた窓、閉じておこうか」

「えへへ、閉めるの忘れちつた……」

と、まあそんな感じで。簡単な紹介をしておこう。

母親に次ぐ頻度で見舞いにやってくる女の子、束だ。

彼女は僕と同い年で親戚、関係は従姉妹にあたる。

昔から泣き虫の甘えん坊で、僕がここに入院した時は自分も行くと言つて聞かなかつたそうだ。

けれど、束が世界中で天才と持て囃されている大人の誰よりも賢い子なんだと、僕は知つている。

束は途方もなく大きな夢を持っているし、それを自力で叶えられる力が十二分にあつた。

生きながら死んでいた僕は、束の夢の先を見てみたいと思った。大

きな映画館を貸切にして、新作を見るように。純粹に応援もしたかつたんだ。

だからせめて束が夢を叶えるまでは死なないと誓つた。誰に？自分自身にかな。日記に書いたくらいで、人には話してないからね。あれから九年。束は高校二年生になり、夢に向かって日進月歩、頑張つてているという。

短い入退院を繰り返しながら、年々容態が悪くなっている僕も、今日は比較的調子がいい。

そんな日に束が見舞いに来たのは、僕にとつても幸運だった。

「ねえゆつきー。……いい？」

「いいよ。はい、おいで」

窓を閉めた束に、僕は自分の膝元を叩いて応じる。

普通ならその前に、窓から入ってくるのはやめなさいとでも言つてあげるところなんだろうけれど、束に今以上の我慢を強いるのは忍びない。

束が自分に懐いてくれることは知つてる。

それでなくとも寂しい思いをさせてしているのだ。

今年は束の誕生日を一緒に祝うこともできなかつたことだし、そのぶん自分に可能な範囲で望みを叶えてあげたかつた。

「ふわ……久しぶりのお膝だあ……。気持ちいい……」

「僕の骨ばつた膝でいいなんて、束は変わり者だね」

「ゆつきーのお膝がいいんだもん」

痩せ細つた太ももに頭を乗せる束の顔は幸福一色。信じられないことに、本気でこれがいいと思っているみたいだ。

自分の薄い肉と骨に、束の頭がくい込んで鈍い痛みが走るけれど、それだけ慕われているのだと思えば安いもの。愛おしさすら感じるこれは、ある種の親心のようなものなのかもしれない。

片手を添えながら、もう片方の手で頭も撫でてやる。

「んふー、もつと撫でるがよいぞー」

「はいはい……。いつもお疲れ様」

「むー、本当だよお……。毎日毎日、退屈な学校に行つてくだらない授

業を受けて、煩わしい人付き合いなんてしちゃってさ……」

「それは大変そうだ」

「あ、ご、ごめん……無神経だつた？」

「ん、なんのことだい？ ……ちーちゃんつて子とは、変わらず仲よくできるのかな？」

今から八年ほど前。 束が小三に上がった頃、珍しく興奮した様子であるクラスメイトの話をしてくれた。

それまでの束は極端に排他的で他者との関わりを嫌う子だつたら、ちーちゃんというお友達ができたと聞いて、ひつそりと安心したものだ。

「ちーちゃんがね、去年うちの道場に弟くんを連れてきたんだよ。いつくんていうんだけど——」

「いつくん？」

「うん。でね、そのいつくんと篠ちゃんがね、なんだかい感じなんだあ」

「そう、いい感じね……」

赤裸々に実妹の浮いた話をする束。

若い世代の微笑ましい話を聞きつつ、僕は久しぶりに有意義な時間を過ごせた。

けれど楽しい時間はすぐに去ってしまうもの。

「束……」

「んーう？」

「そろそろ先生が来るよ」

「…………」

背中をぽんぽんと叩き、束の体を揺する。

一体どれくらいの時間をこうして過ごしたのだろう。

窓の外を見ると、すっかり明るくなつていた。

「…………もう、そんな時間なんだ……」

太ももに顔を埋めていた束が、僕のお腹に抱きつく腕に力を込める。

毎回毎回、僕も断腸の思いで話を切り出すんだ。

実際、本当にはらわたを切つたことはまだないけど……。

「今日はもう帰るか、一旦病院を出て、面会の予約を入れて戻つてくるか……どうしたい？」

「……離れたくない」

か細い声が返ってきた。いつもより力が強い。

でも、それでも僕は束に言わなければならぬ。

なにせ束がお見舞いに来るたびに、こうして帰る帰らないの問答がおこなわれているのだ。

もしここに束がいることを誰かに知られたら、どうなるか想像に難くない。

他人の規則など知つたことじやないものの、束まで怒られてしまうのはなんとしてでも避けたい。

「そつか……そだよね。でも、僕がこれから検査をしないと、病院の人たちも困つてしまふんだよ」

「ゆつきー、そうやつていつもあの人たちの肩を持つよね……」

ふと、不穏な空氣を察知する。

いつもならこれで離れてくれる束が、今日は抱きついたまま動こうとしない。

じわりじわりと、さらに強く力が込められていつてているように感じた。

「別に肩を持つわけじゃないさ。ただ、彼らも仕事だから……」

「……あんな人たち、ゆつきーのことなんてなにもわかつてないよ！」

突然大きな声を出した束に、目をぱちくりとさせる。

「待つても待つても、ゆつきーはぜんぜん元気にならない。それどころかどんどん悪くなつて。ねえゆつきー、ゆつきーの病気はよくなるの？ ここにいたら、あの人たちがゆつきーを見ていれば、本当に元気になるの？」

……痛い！

僕のお腹に頭をぐりぐり押し当てながら、束が腕を万力のように締め上げはじめた。

こんなに声を荒らげるなんて、今までに見ない豹変っぷりだ。

それにしても痛い！

「つ——そうだね、それが彼らの仕事だから」「ゆつきー、うそついてる……」

「嘘じやないさ」

「なんで、どうしてうそつくの?!」

悲鳴のような声。

非難の真意を汲み取ろうと四苦八苦していると、東が冷ややかな一言を放った。

「日記読んだの」

「……え？」

どういうことか聞き返す前に、

「私が夢を叶えるまで死なないってなに？ どういうことなの？ ねえ、元気になつたら私の夢を叶える手伝いをしてくれるつて約束じやんつ。ねえ、元気になるんじゃなかつたの？ どうなの？」

「それは誤解だ。僕は——」

「……ゆつきー、もういつかいこっち向いて」

顔を埋めたまま、東は僕の言葉に耳を貸さない。

「……ずっと見てるよ」

「ううん、そうじやなくて……」

「……？ いつつ——」

傾げた首筋に、鋭い痛みが走った。

乾いた音と、束の匂いがふわりと香る。

「な、にを……？」

「ちょっとだけ眠たくなるかもだけど、次に起きた時にはきっと元気になつてるはずだよ……」

意識が薄れる中、針のない注射器のような筒を握る東の姿がぼんやりと視界に入った。

「起きたらもつとお喋りしようね、ゆつきー……」

本編

プロローグ

××月××日

母さんが退屈なら日記でもつけてみたらって。

ノートも貰つたけど、何を書けばいいんだか。

××月××日

学校に行つた。——行つただけ。

体育には参加できないし、授業もつまらない。

こうして書いたはいいけど、なんだか違う気がする。

××月××日

しあやもを食べた。美味しかつたです、よ。

これも違うか。

××月××日

今日は僕の従姉妹について書いておこうか。

名前は箒と東、箒が妹で東姉さんが姉だ。

二人とも近所に住んでいる。けれど、同じ年の箒とは会うことも少ないし、あんまり話さない。

東姉さんはよく遊んでくれて、話が面白い。ただ、たまにお医者さんごっこをするのがくすぐつたくて少し苦手だ。

××月××日

今日は身近な人について書こう。

名前は一夏、僕より箒と仲がいい男の子。

箒のお父さんが剣道場の師範をしていて、一夏とそのお姉さんが門下生のひとりなのだ。

ちなみに一夏のお姉さんは東姉さんの幼なじみで、よく姉さんの部屋にやつてくる。僕とは挨拶を交わすくらいだ。

これで身近な人つて、僕の交友関係せまいな……。

××月××日

今日も姉さんの部屋にひとりで遊びに行つた。

姉さんが夢を詰め込んだ和室のひと部屋は、いつか僕がテレビで見た秘密基地みたいでかつこいい。

ここで月に行くマシンを作つてゐるんだつて、姉さんは言つていた。僕が大きくなつたら一緒に月面旅行する約束もしてゐるから、その日が楽しみだ。

××月×日

今日は一日中、姉さんの部屋で姉さんがパソコンカタカタしてゐるのを見ていた。

布団から外の雲を眺めてるよりも、こっちの方が好きだ。

人といふと、自分が生きてる、ここにいるんだと実感できる。

××月×日

今日も姉さんと夕飯を食べた。

××月×日

お母さんたちには内緒だよつて、唐揚げをひとつくれた。

××月×日

筍が一夏とまた喧嘩していた。

二人はよく喧嘩してゐる。どうせなら、もつと仲良くすればいいのに。

××月×日

筍ちゃんはいつくんラブなんだけど素直になれないんだよつて、姉さんは言つてたけれど……まあ、元気なのはいい事なんだよな。

××月×日

熱が出て、また学校に行けなかつた。

おじさんの道場から、賑やかな声が聞こえてくる。

つまらない。退屈な人生は、死んでるのと同じだ。

おにぎり型の雲を八つくらい数えてやめた。

××月×日

つまらない。退屈で死にそう。

寝床を抜け出して姉さんのどこに行つたら、少しして母さんに見つかつてむちや怒られた。

風邪つひきなんてよくある事なのに、母さんも皆もいつも大袈裟だと思う。

××月×日

熱が出てると姉さんとご飯が食べられない。

おかゆは美味しいし、ハンバーグが食べたい。

×月×日

元気になった。

学校に行って、半分を保健室ですごした。

もう平気なのに……けど、先生は心配するのが仕事だから仕方ない。

篠と一夏はまた喧嘩して、その日のうちに仲直りしてた。そんなんなら喧嘩しなきやいいのに。

×月×日

久しぶりに姉さんが遊んでくれた。

手術台みたいな椅子に座つて、仮面ライダーコン。

見てて楽しいから特撮好きなんだよね。

×月×日

熱が出た。

いつもより高いらしい。

布団は退屈だ。

×月×日

近くの病院に入院する事になった。

大した事ないのに母さんたちは心配しそぎだと思う。

けど、いろんな機械が並んだ病室は悪の組織みたいでちょっとだけ

ワクワクした。

×月×日

七歳の誕生日。母さんがお祝いしてくれた。

×月×日

起きたら髪が白くなつてた。

知つてる、これ若白髪つてやつだ。

頭いいやつがなるつて、上級生が言つてるのを聞いた事がある。

……つまり僕も頭がいいつて事? 姉さんが言つてること、たまに

わからない事があるのに?

×月×日

つまらない。

ベッドから抜け出すと、すぐに大人がやつて来る。

雪夫くん寝てなきやダメでしょーつて。

の人たち、ちょっとヒステリード。

×月×日

姉さんが酷く落ち込んだ様子で部屋に来たので、どうにかこうにか励ました。

日記に書いてもわからないかもしないけど、姉さんならきっと大丈夫だ。

×月×日

姉さんが今度はお見舞いに来てくれた。

いいところに連れてつてあげる、そう病院から連れ出されて、姉さんが作ったロボットがミサイルを落とすシヨーと一緒に見た。夕方戻った時にめちゃ怒られたけど、こないだと違つて姉さんが楽しそうだつたから、まあいいか。

×月×日

家に戻つて來た。一夏たちと久しぶりに会つた。

×月×日

テレビで姉さんを見た。

本人が隣にいたので、すつごい驚いた。

姉さん、いつ有名人になんてなつたんだろう……。

×月×日

九歳の誕生日。今年は家でお祝いをしてもらえた。

×月×日

神社の方に参拝する客が増えたのか、最近家の周囲が騒がしい。

神主のおじさんや母さんは、どこか怒つているようだつた。

おばさんも疲れてるみたいだし、忙しくてイライラしてるのがもしれない。

×月×日

姉さんが怒つた。

学校から帰つてきた僕が家の前に集まつてゐる大人に押されて、転

けたのを気にしてるらしい。

怪我そのものは膝を擦りむいた程度で、大した事ない。

それなのに母たちも怒つてたし、みんな大袈裟だ。

×月×日

姉さんが消えた。

篠や、おじさんとおばさんもどこか遠くに行つたらしい。

神社には管理人の母さんと、僕だけが残された。

×月×日

五年生に学年が上がつた。

まあ、だからつて特別な事は何もないんだけども。

×月×日

昨日の夜から降つてた雨が、家を出る前にやんだ。

春の雨上がりは好きだ。夏は嫌いだ。

×月×日

今日も変わらない一日。

心なしか、前より一夏といる事が多くなつた気がする。

×月×日

僕のクラスに海外から転校生がやつて來た。

中国人の女の子で、名前は鈴音。元気な子だ。

迷つているところに鉢合わせた一夏が、その子を見た目で下級生だと勘違いして顔面にグーグー。パンされてた。

×月×日

今日はうちで勉強会。

本当は一夏が勉強教えてくれつて頼み込んでできただけなんだけど、

そこへつい最近仲良くなつた鈴音がねじ込んできた。

『あんた意外と勉強できるのね』つて、それはちょっと酷くない?

×月×日

家庭科の調理実習でカレーを作つた。

誰が作つてもおいしい定番のカレー——のはずが。

ここ最近になつて織斑家の家事全般を担うようになつたらしい一

夏が見事なカレーを鍊成し、我が班の鈴音が鍋を爆発させた。

お陰でC班はカレーから急遽炒飯もどきにシフトチェンジさせられた。

×月×日
卒業式。

式の途中に泣き出す子もちらほら……。

僕は高学年になる前はとにかく休む事が多かつたし、あんまり思い出とかはなかつた。

一夏たちとは同じ中学に進学する予定だ。

×月×日

東姉さんから小包が届いた。

届いたというか、庭に突き刺さつたというか。

きつと『入学祝いだー』つて、勢い余つてやつたんだろうな……姉さんらしい。

近未来的なデザインのブレスレット、色は白とマゼンタ。ピンク。
……それで、お姉ちゃんはいつも近くにいるよつてどういう意味？

×月×日

今日、一夏たちが新しい友達を二人も連れてきた。

名前は弾と数馬。弾は食堂の子で、数馬はサラリーマンの子。
忘れない内にここに書いて覚えておこう。

×月×日

久しぶりにちよつとした風邪を引いた。

まあ、タイミング的にはよかつたのかもしれない。

千冬さんの大事な試合があるとかで、一夏はひとりで小旅行。

弾と鈴は実家の手伝いがあるとかで予定が埋まつていて、数馬は数馬で『じゃあ、俺も予定があるって事で……』とか言い出し。

今回くらいは大人しく寝ておく事にしよう……。

×月×日

猫とのにらめっこ。

決着が着く前に待ち合わせの約束をしていた鈴が來たので、今回は引き分け。

これで全309試合109勝107敗93引き分けだ。

あのまま続けてれば多分、僕が勝つてた。

×月×日

今日も暑い。ムカつくくらい、暑い。

出かける時に必ず母さんも一夏たちも人をいつも以上に病人扱いしてくるから、夏は嫌いだ。

×月×日

一夏たちとスイカを食べた。

弾の妹がスイカの種を飲み込むとお腹の中で芽が出るという迷信を信じてたみたいで、種を飲んだ一夏を見て大騒ぎをしてた。誤解はすぐに解けたものの、今度は弾がボコボコに……。

安易に人に嘘を吹き込むのはやめよう。

×月×日

今日は誕生日。

今年も東姉さんからボイスメールが届いた。

内容はいつも通り誕生日のお祝いと、世間話が少々。

最後に姉さんが泣きながらぐだぐだと垂れ流し、そこでいつものようには締めくくられる。

プレゼントは不思議な味のカツブケーキだった。

×月×日

今日から中学二年生。

中学に上がつてから、病欠で学校を休む事が減つた。

前ほど熱も出なくなつてるし、体の調子もいい気がする。

となれば、今年こそ海に行つてやるぞ。

×月×日

ししゃもを食べた。美味しかった。

……なんかデジヤブを感じる。

×月×日

僕の靴箱にまた手紙が入つてた。

多分、ラブレターつてやつだ。

上が一夏の靴箱だから、みんな間違えて入れてしまふんだと思う。見た瞬間、ピンと来たね。

きっとドジつ子だつたんだな……。

一夏はイケメン……とはまた違うと思うものの、千冬さんに似ていてキリツとしてるからな。

気の一助になつてのかもしけない。

髪伸ばしたら千冬さんそつくりになりそうだし、そういうとこも人ぐりと開けるくらいにはウイッグと割烹着が似合つてたつけな。

×月×日

鈴がいつかのリベンジをすると言い出して、家にやつて來た。

何をするのかと思つたら、台所に入るなり始めたのは料理。

そういえば昔、調理実習で派手に失敗してた記憶が……。

完成したのは八宝菜。また今度練習して酢豚を作ると息巻いていた。

美味しかつたけど。……え、うちで食堂でも開くおつもりですか？

×月×日

今日は期末前の勉強会。

弾がヒーヒー言いながら数学のドリルをやつっていた。

一夏も中学に上がつてからアルバイト三昧で成績が暴落してるとかで、ちやぶ台にかじりついて勉強漬け。

最後の方、頭から白い煙が出てたけど大丈夫なんだろうか。

ちなみに数馬はこつこつやるタイプで、鈴は一夜漬けでどうにかするタイプに見せかけて、実はこつそり努力してるタイプだ。

×月×日

鈴と海に行つた。

一夏たちも誘つたのに、用事があるとか夏休みの宿題が終わらないから無理とか、友達がいのないやつら。

いいよ、鈴が付き合つてくれたし。

……母さんはついて来なくともよかつたんだけどな。

×月×日

さつき久しぶりに流れ星を見た。

消える前に願い事三回……は、無理。

でもまあ、せつかくだから雲に乗つてみたいという願望を込めて
祈つておいた。

乗れないとわかつても、人は雲のベッドに憧れるものなのだ。
寝具に口うるさい僕が言うんだから間違いない。

×月×日

鈴がまた転校するらしい。

本人から聞いたので、これは確実だと思う。
二年の冬に国に帰つてしまうのだそうだ。

せつかく仲良くなつたのに、また寂しくなるな……。

×月×日

今年も文化祭がやつてくる。

僕のクラスは例によつて喫茶店、それも去年と同じ男装女装喫茶。
クジで選抜された接客係が、それぞれ男装と女装をするのだ。
前回同様に一夏が当たり——ハズレくじを引いて、絶望してた。ド
ンマイ。

ちなみに僕は客引き係で、教室の前に椅子を設置して座つてるだけ
でいいらしい。やつたね。

×月×日

おい、僕までエプロンドレスを着せられるなんて聞いてないぞ。

×月×日

一部の生徒の犠牲により、今年の文化祭も大成功を収めた。

記念撮影の最後に撮られた一夏とのツーショット、あれは一生ネタ
にされそうな気がする。

×月×日

そういえばあれ、どうなつたんだろう。

弾たちが言い出した、私設・楽器を弾けるようになりたい同好会つ
てやつ。

結局何もしないまま、ずるずるともう中学も二年が終わりそうになつてるんだが……？

×月×日

今日は鈴に誘われて買い物に出かけた。

今生の別れみたいで嫌だから、特別な事とかはしない。

ただ、帰り道の途中で鈴が――

『あんたいつつもボケーっとしてるけど、うつかりあたしの事忘れた
り、ぽつくり逝つたりするんじやないわよ!』だつて。

失礼な、流石に友達の事まで忘れたりしないって。

×月×日

二年の後期が終わり、同時に鈴は国に帰ってしまった。

またいつか会えると信じて、僕らは鈴を見送る。

それはそうと、私設・楽器を弾けるようになりたい同好会での僕の
担当が決まつた。横笛だそうな。

×月×日

最近、手紙の誤投函が増えてるような気がする。
週一とかザラだし、もはや嫌がらせを疑うレベル。

ただ一夏の謎すぎる競走倍率を考えると、これでも妥当なところだと
思えるからこれまた不思議だ。

弾の妹さんもそぞららしいし、このところ一夏と一緒にいるだけでも
ちやくちや視線を感じるようにもなつた。

恋する乙女つて怖いわ……。

×月×日

三年も前半戦が終了。

僕らもいい加減、進路を決めとかないといけないわけだが。

やたらと一夏が推していくので、とりあえず第一志望は藍越学園つ
てどこにしておこうと思う。

×月×日

母さんが僕の将来について訊いてきた。

とりあえず大学卒業まで寄り道をしつつ、母さんの跡を継ぐのが無

難などこなんじやないだろうか。

東姉さんとの約束もあるし、サイバー神主なんか目指しちゃつたり
してもいいかもしれない。

×月×日

夜更かしすぎて体壊した。油断した。

××月×日

入試に向けての追い込み勉強会。

一夏は当然として、弾たちも参加した。

定期的に——特に期末前なんかは必ず勉強会を開いてる事もあつて、アルバイト三昧の一夏でもなんとかなりそうだ。

××月×日

I S 学園の入学要項なんてものを、自宅で黒服の男たちに聞かされた僕と一夏。

……あれ、僕ら藍越学園の入試受けに行つたんじやなかつたつけ?

××月×日

家に帰つたら姉さんが踊つて出迎えてきた。

いや、何事?

入学式

俺には目の離せない、危なつかしい同い歳の幼なじみがひとりいる。

『探したぞ、雪夫』

『あ、一夏……。やつほー』

『こんなどこで、何してたんだ?』

『これ、たんぽぼの綿毛……数えてた』

そう言つてたんぽぼに息を吹きかけるのは、件の幼なじみ、宮田、旧姓篠ノ之雪夫だ。

線が細い上に肌は色白く、ある日を境にすっかり色が抜け落ちてしまつた髪を、短すぎず長すぎない程度に切り揃えている。

あいつを見て『触れると溶けて消えてしまいそう』なんて言つたのは、誰だつたつけな。

『108本』

『……え?』

『そこから数えてからわからなくなつた』

『あ、おう?』

雪夫と出会つた頃の記憶は薄い。というか、ない。

昔普通つっていた道場の帰りに、神社の境内で寝ているのを見たことがあつた程度。

小二の頃に同じクラスにもなつたが、当人の病欠が多くて話す機会もあまりなく。

俺たちが本格的に話をするようになつたのは、筈たち一家が引っ越してからだつた。

環境が大きく変わつた事で、ふと、ひとりぼっちになつた幼なじみの姿が目についたのだ。

『もう外に出て平気なのか?』

『……病院でずっと寝てたから平気』

『つまり黙つて抜け出してきたんだな』

『今日は調子もいいし、大丈夫』

あれは、小学三年の終わり頃の事だったと思う。

何を言つても『平気』『大丈夫』の一点張りで、結局おばさんが連れ戻しに来るまで、雪夫はそこに居座つていた。

『心配させないで』と表情を強ばらせた雪子おばさんに、あいつが珍しくきまりの悪そうな顔をしていたのをよく覚えている。

なんとなく見ていてやらないといけない、そんな気持ちにさせられた。

『あ、おはよ』

『うわ……すごい格好だな、何枚着てるんだ?』

『五枚くらい……暑い』

『お、おいおい脱ぐなよ?!』

『心配しすぎ。汗かいて冷えたら意味ない……』

いつだかの冬に、そんな会話をした事もあった。

雪夫はよく心配しすぎだと言うが、みんなが揃つてあいつの体調に気を遣うのも無理はない。

実際のところ雪夫は決して少なくない数の入退院を繰り返しているし、酷い時には会う度にやつれていってた程だ、見る影もなく。

高校に上がった今はそこそこ元気な方だし、病氣で学校を休んだりする事も格段に減つてるけどな。

で、この頃にはもうそれとなく目の届く範囲にいることが当たり前になつっていた。

『これ、学校のプリント。……大丈夫か?』

『平気、平気、ちょっと熱が出てるだけ』

『……しつかり寝て、治せよな』

『大袈裟。大した事ない』

中学校に上がる頃も、俺が幼なじみの鈴と交代で学校で配られたプリントを持っていく事はそれなりにあつた。

病弱というわけではなくて、ただ本当にあの頃はとことん体が弱かつたんだと思う。

それでいて普段は表情が乏しく、あまり饒舌とも言えず、何を考えてるのかもよくわからない。

辛いとか、苦しいとか。あいつはそういうた事を何も言わない。

『平氣』

怪我をしても熱が出ても、死にそうになつていても。

あいつは顔色ひとつ変えないし、それどころか何でもない事のように言いやがる。

何度も死にかけてる内に、髪の毛の色と一緒に感情まで抜け落ちてしまつたんじやないか。

そして元気になつた今でも、抜けしまつたものが一切戻らないままなんじやないか。

そんなはずがないのに、俺はそう思えて仕方がなかつた。だから、鈴が転校してまたひとりになる事が多くなつてからは、俺が鈴の分まであいつの近くにいるようにした。

けど、それは間違いだつたのかもしねれない。

『ごめんな、雪夫。俺が試験会場間違えたばっかりに……』

『気にするなよ。俺は気にしてないし』

『本当、悪かつた』

『いいよ。俺は大丈夫だから』

きつかけは俺が道に迷つた事。そして、不用意に設置してあつた機材に触れてしまつた事。

そうして I.S 学園への強制入学が決まつた時も、俺の隣で黒服の男たちの話を聞いていた雪夫は何も言わなかつた。

俺への文句も、責めるような事も。何ひとつ。

いつも、恨み言のひとつでも言つてくれればよかつたんだ。

なのに、あいつは大丈夫と言つて家に帰つていつた。

そして次の日から学校に来なくなつた。

突然やつて来た東さんに連れられてどこかに行つたようで、雪子お

ばさんも居場所を知らないらしい。

心にできた小さなしこりは、雪夫と別れた後も俺の中に残り続け

……。

結局、次にあいつと会つたのは、入学式の日だつた。

◇

××月××日

家に帰つたら姉さんが踊つて出迎えてきた。

いや、何事?

あの謎の歌唱力といい、さすが姉さんといった感じなのだが。

油断して近寄つたところを口ボうさちやんに捕獲されてしまい、改めて姉さんが一通り踊り終えたところで詳しい事情を訊いてみたら。どうやら姉さんは僕がI-Sを動かした事をどこからか聞きつけて、慌てて駆けつけて来たらしい。

そのまま僕の体をぺたぺた触りながら『大丈夫?』、『具合悪くなつてない?』と、死にそうな顔しながら訊いてきた。

僕はやつれてる姉さんの方が心配だよ。

で、触診? の後、僕は姉さんに拐われた。

荷物の支度をする時間はもらえたので、着替えと日記を鞄に詰めて、母さんには行つてきますと一言だけ。

準備をしてる間、ずっと姉さんが腰にしがみついてたものだから、母さんがすんごい顔してた。

×月×日

ここにきて、起きたら三日も日が経つていた。

驚いたのは姉さんが僕が昔に使つていたお古のレコードと小さなプレーヤーを持つていた事……随分前に無くしたと思つたらそういう事だつたのか。

それから、憧れの秘密基地には知らない女の子がいた。どうやら姉さんがどこからか拾つて育てていた女の子らしい。

名前はクロエ。姉さんが命名したにしては普通の名前だ。いきなり襲われたのに驚いて、つい叩き落としてしまったのは悪かつたと思つてる。

どういうつもりか姉さんは、警戒するクロエに僕の事を彼女の父親だと紹介した。

白髪頭とはいえ僕はまだ高校生なんですが?

××月×日

膝枕しながら、東姉さんとIS学園の入学式に備えて勉強をする。ISは姉さんが作つたものなので、これほど最適な先生はない。つまり僕はとても運がいいということだ。

でも、姉さんさ……。

お腹に顔を埋められたら、何言つてるかわからんないんですけど。

××月×日

今まで姉さんつて食事どうしてたんだろうか。

心配になつてくるから、僕が用意したごく普通の三食とおやつを号泣しながら食べるには正直やめてほしい。

クロエもドン引きしてるし、泣き虫と甘え癖が前より酷くなつてのも少しでいいから直してくれると嬉しいんだけどな……。でも姉さんが頼つてくれるのに、悪い気はしない。

××月×日

クロエが僕と目を合わせて話をしてくれるようになつた。

口調はまだぎこちないものの、少しだけ仲良くなれた気がする。

××月×日

今日までのお礼だと、姉さんが特製のリクライニングシートとやらに座らせてくれた。

僕用に前々から作つてくれていたらしく、体温と血圧まで測つてくれるスグレモノなのだと。

お礼なんて、勉強に付き合つてもらつた僕の方がしたいくらいなのに。

××月×日

リクライニングシートに寝て、気が付くと四日も日が経つっていた。やだ、効果覗面過ぎ……？

××月×日

今日も今日とて膝枕しながら勉強。

クロエが興味深いものを見る目をしていたので、少しだけ膝を貸した。

除かされた姉さんがクーちゃんにゆつきーのお膝盗られた！ と

マジ泣きして騒ぐので、時間的には本当に少しだけ……。

よくわからなかつたそつだが、どうやら満足できたみたいだつた。

×月×日

昨日のアレがよくなかつたのか、今日は姉さんが丸一日離れてくれなかつた。

僕ももう高校生なんだから、さすがに姉さんとお風呂は恥ずかしい。

……でもまあ、よくよく考えてみれば姉さんは大きな赤ちゃんみたいなものなんだから、あんまり恥ずかしがるような事でもなかつか。

そもそも家族だし、知らない人じやないものね。

×月×日

入学式の予定日も迫つて来ている事だし、クロエに料理を一通り教える事にした。

何でもかんでも消し炭やゲルに変えてしまう才能には驚かされたものの、最初は火を使わないおにぎりから始めて、日が沈む頃にはなんとか綺麗な目玉焼きが焼けるところまで持つていけた。

また近い内に、今度は焼き魚に挑戦してみよう。

×月×日

姉さんが今朝突然、僕に専用機を用意すると言ひ出した。

突然といつても計画自体は前々から練つていたらしく、遡る事十年前には既に僕と遊ぶついでに手をつけていたという話だ。

それで結局、ISには女性しか使えないという姉さんでも理由がわかつてない仕様同然の欠陥があり、ゆつきーが乗れないんじや意味ないじやん！ と計画は今日まで封印されていたのだそう。

……え、じゃあ、あのお医者さんごつことか、仮面ライダーごつこも全部、計画の一部だつたつて事？

×月×日

入学式まであと三日。

明日には家に帰らなければならないので、直前までにクロエとも別れの挨拶を済ませておこう。

結局最後の最後まで姉さんはごねてたけど、こればっかりは仕方ない。

××月×日

家に帰った。ちょっとぴり疲れ気味……。

母さんがどうだった？ と訊いてきたので娘ができたらよとだけ返しておいた。

別れ際にお父さん呼びはズルいよなあ……。

××月×日

今日は入学式。

式が終わつたら教室で自己紹介をして、後は普通に授業をした。どうやら一夏は一組に、僕は二組にクラス分けされたらしい。なので、周りは本当に女の子ばかりだつた。寮の部屋もバラバラだつたし、そこは少しだけ残念。

××月×日

一組に篝がいた。

一夏は昨日、クラスメイトの女の子と早速揉め事を起こしたらしく。

我ら二組は平和そのものだ。

とても静かで、お隣の騒ぎがよく聞こえてくる。

い。

23

マツドネスお姉ちゃん

それは、突然の出会いだつた。

おばの雪子が我が家に連れて來た男の子。

空き部屋に寝かせていると聞いていた筈の子が、私の部屋に近い中庭に倒れていた。

見かけた瞬間、肝を冷やしたのは言うまでもない。

地面に伏せたまま、ぴくりとも動かないのだ。

従弟の体がとても弱い事は、両親とおばの会話から察していた。なので、『これはもう死んでる』と、そう思った。

でなければ、その一步手前か……。

『お、おーい。い、生きてる？』

倒れている男の子に歩み寄り、小さな体を怖々と揺する。

いくら他人に興味がないとはいっても、目と鼻の先で倒れてる親戚を無視出来るほど腐ってはいない。

これは親友のちーちゃんの影響かな。

さすがに声をかけざるを得なかつたとも言う。

初めて触れた異性の体は驚くほどか細く、火傷してしまいそうなほどに熱かつた。

『……お姉ちゃん、誰？』

と、髪や頬に土埃をつけながら、顔をぐるんつとこちらに向ける男の子。

まだ小学校にも上がつていなさそうな幼い見た目でありながら、既に整つてゐる顔立ち。

吸い込まれるような深い黒と、目が合う。

瞳の奥に、顔を真つ赤にさせた私がいる。

その瞬間、胸が跳ねた。

『ず、ずつきゅん……』

……煩い。

どつどつどつ——、と忙しく動く自分の心臓の音が、痛いほど耳に届く。

生まれて初めての感覚、未知の感情。

今にして思えば、わかりやすい一目惚れだ。

『お姉ちゃん、誰?』

男の子の再度の問い合わせにはつとする。

いけない、いけない。この私が取り乱すなんて。

冷静に、冷静にならなくちゃ。変な人だと思われないようにならないと……。

『わ、私? 束さんだよ、親戚だよ、従姉だよ、お姉ちゃんだよお~。君は、君は? 何歳? ここで何してたの?!』

うん、無理だね。無理、無理。

頭は冷静なつもりでも、心が追いついてくれない。

ハートをすっかり驚掴みにされてしまったのだ。この私が、初めて会った年下の異性に。

詰め寄る私に男の子は目をぱちくりとさせ、地面を見る。

『……雪夫。篠ノ之、雪夫』

『へ、へー。雪夫くんは何してたの?』

『アリを数えてたの……』

囁くような声に釣られて、地面に目を向けると。

確かに雪夫くんの鼻先には、アリの行列があつた。

点々と列をなして、草陰から巣穴へと行き来している。

倒れてたんじやなくて、うつ伏せになつてこれを数えてたんだと理解するのは、さほど難しくなかつた。

『——あつ。どこまで数えてたか、わからなくなつた』

きゅうううう——ん!

しょんぼりしてる! 可愛い! 可愛い可愛い!

苦しくはない。けれど胸を締め付けられるような高揚感に、私の心は二度目の暴走をはじめる。

はつきり言つて、この時から私はバカになつていた。

でも、この脳がゆっくり溶けるような感覚は不快ではなくて、むしろ心地がよかつた。

『ね、ねえ雪夫くん。お姉さんの部屋に来ない?』

『……東姉さんの部屋？』

『う、うん。すぐそこにあるんだけど……。アリさんを数えるより、きっと楽しいと思うよ?』

雪夫くんの手を取つて、起き上がらせる。

事案？ 逆光源氏計画？ し、親戚の子だしセーフセーフ！

（お姉さんの魅力で
絶対にこの手を人口人口にしてみせるぞ――）

あれから数年——。

「よしよし…

泣きながらゆつきーの腰にしがみつく私。

いつの間にやら 私は泣きながら背中を撫でてもらうのか
すつかり癖になつてしまつていた。

ゆつきーは拒まないし、こうしてると安心する。

「決まつてしまつた事だから、もう仕方がないんだ

「でも、寂しいんだもん……」

「そうだね、僕も寂しいよ」

こうして優しく、諭すように囁かれるのも好き。

私はもうゆつきーにメロメロだ
あれ、うつむかへなあ。

結構早い段階で、私は精神的に弱くなつていた気がする。昔は子守

唄で寝かしつけてあげたり、もつとお姉ちゃんっぽい事を沢山してあげられていたはずなんだけど……。

かといつて以前の私には戻るつもりはないし、戻れと言われたところで戻りたくもない。

……脣中も「とおしょし」でして〔

「そしたら、頑張れそう？」

「……わかんない」

「そつか。よしよし……」

向かい合う形で膝に座ると、ゆつきーが優しい手つきで撫でてくれる。

世の中はつらい事ばかり。なかなか思うようにいかないし、それでいて要求ばかりされて、どんどんストレスが溜まつていく。

私の可愛い愛娘たちはバカな連中の玩具になつてしまつていて、惑星開拓だつて全然進んでいない。

宇宙の神秘は？ 人類の宇宙進出は？ 星間旅行は？ こんな状況で月に大都市なんて、夢のまた夢……。

「夏休みにまた帰るから、ね？」

「やあだあ～」

「ちよつと我慢するだけ。少しだけだよ」

その我慢が嫌なんだもの。

無理やり行動を起こしたせいで追われる身になつちゃうし、離れ離れになつた箒ちゃんにも嫌われちやうし、手伝ってくれたちーちゃんだつていい顔しないし。

私が面倒な性格してるのはわかつてること、なんだかもう、全部が嫌になつてしまつた。

よつて私はこうして、ゆつきーに甘やかされながら一生、生きいくと心に決めたのだ。

明日の事なんかもうしーらないつと。

「大丈夫。姉さんは強いんだから」

はあ好き……。もつと甘やかして。ふやかして。

全身を預けるようにしながら、頸をゆつきーの肩に乗せる。

ゆつきーはあれからぐんぐん成長して、格好イイ男の子になつた。昔は、可愛い！ つて感じだつたけど、今は断然イケメンさん。

私よりも大きくなつて、簡単に抱き締められちやう。

ゆつきーの包容力に、私はキュンキュンしつぱなしだ。

本当に、ここまで生きてくれてありがとうつて言いたい。

「ううん、強くない。強くないよ。ゆつきーに何かあつたら、お姉ちや

ん耐えられないもん……」

「心配しすぎ。僕も昔よりは体、丈夫になつてゐる」

「ふふん。お姉ちゃん、頑張つたからね！」

「うんうん。姉さんは頑張り屋さんだ」

本当だよ。

免疫力の方は、私のお薬入りカップケーキで順調に改善されつつある。

無理をして体を壊してしまつては元も子もないから、ゆつきーの誕生日に合わせて毎年少しづつ投薬していくつた。

大きくなるにつれ、薬の量を増やしてみたり、ナノマシンを導入してみたり……。

そうやつてちーちゃんもそろそろ食べてくれないような私のプレゼントを、ゆつきーは何の疑いもなく美味しいって食べててくれるし、身に着けてくれるから、お姉ちゃんとして発明しがいがあるというものだ。

丈夫にするついでに今日ここに来て、経過観察をしながら小分けにしてちよびつとずつ体を弄つたりもしたけど、それもこれもゆつきーに長生きしてもらうため、

『そしたらさ、ゆつきーはどうしたい？』

『んー……。あ、月でうさぎさんとお餅つきかなあ』

『つ、月にうさぎさんはいないと思うけど……』

『……いないの？』

『ど、どうだろう？…………じゃあ雪夫くんがお外で沢山遊べるように

なつて、今よりずっと大きくなつたらさ。そしたら一緒に宇宙に出て、お姉ちゃんとうさぎさん探すところから始めよつか！』

『うん、指切り……』

『ゆびきりげんまーん！』

そして約束のため、計画のため。

あ……。でも、純粋なのはいいけど、私以外の人から貰つた物も疑

わざに食べちやうのは、お姉ちゃんどうかと思うな。

お姉ちゃん、嫉妬しちやうぞ。

「だから、僕も学園で頑張らうかな。姉さんもクロ工と仲良くね？」

「……うん、頑張る……」

涙を飲んで……。

これからは東さんの計画も第二段階。導入した「によ」によ……ごほん、ナノマシンの活性化と定着、そしてこれから用意するISに慣れてもらう事。

私もちーちゃんの……弟の、いつくんならもしかしたら、とは思つてたけど、ゆつきーにまでISの適性があつたのは、正直嬉しい誤算だつた。

一度諦めてしまつたスーパーゆつきーウルトラゆりかご計画も再始動させられるし、お姉ちゃん万々歳。

最初は不信感すら抱いていたクーちゃんへの刷り込みも上手くいつてるし、ゆつきーのパパ化も順調。

それに、これからちよつと忙しくなるから、まだきつと耐えられる。計画のために色々とやらなきやだし、篠ちゃんへの誕生日プレゼントと、遅めの入学祝いも用意しなくつちや。

頑張れ私、頑張れ!!

「あ……。なでなでやめちや、や!」

「はいはい。ごめんね」

「んふう……」

……頑張るのは、もうちよつと後でもいいよね……。

クラス代表決定戦

×月×日

一組に筈がいた。

一夏は昨日、クラスメイトの女の子と早速揉め事を起こしたらしい。

我ら二組は平和そのものだ。

とても静かで、お隣の騒ぎがよく聞こえてくる。

昼には一夏たちが二組まで来たので、学食に行つてお昼と一緒に食べた。

今日見た感じ、一夏はまだこうなつた事を気にしてるっぽい。

筈もせつかく久しぶりに会つたのに、嫌なタイミングで邪魔が入つたみたいな顔するのは勘弁して。

なんだか、ギスギスしてるよなあ……。

英國の代表候補生と、一夏が勝負するつて話。

一夏は昔から直情的などころがあるから、つい売り言葉に買い言葉で話が勝負にもつれ込んでしまったんだろう。

もう上級生にまで話が広まつてるらしいし、試合の様子が生徒に公開されるとか、アリーナの観客席を予約制にするとかしないとか。結構大事になつてきてるな、と。

上級生が一夏に個人指導の話を持ち掛けていたものの、一切合切の面倒は筈が見るつもりなんだとか。

お前たちは手を出してくれるな、つて目が本気だったなあれ。
もれなく僕までハブられちゃつたし。

僕も一夏の幼なじみだし、筈とは親戚関係なんですが……ま、いいや。

そんなこんなで放課後、風の噂によると一夏は剣道場で筈にボツコボコにされたらしい。

なんでもまた剣道場？ てか、ISSどこ行つたの？ 基礎知識のお勉強は？ 疑問は尽きない……。

×月×日

今日も二組は静かだつた。

多少視線は気になるものの……女子校のクラスに男子がひとり居るんだからこれは仕方ない。

姉さんのお陰で授業にも難なくついていけてるし、慣れない環境で生活する上での、精神的な疲労あまり感じていないからモーマンタイ。

ただ、こないだまで姉さんたちと生活していたからだろうか。

ちょっとだけ寂しくもあつたりして……。

これじやあ姉さんに甘えん坊なんて言えないな。

こつそり様子を見に行つた感じ、一夏たちは昨日と変わらず剣道場でバチバチやつてるっぽい。

剣道の稽古を通して基礎的な動きを体に覚えさせておけば、IS戦でもある程度は有利に働きはするだろうけれども、それをぶつつけ本番でどこまで生かせるのやら……ちょっと心配だ。

×月×日

さつきそこで千冬さんに会つた。

一夏のお姉さんが学園で教師をやつてるつて話は、姉さん経由で知つてたから驚かない。

ただ、昔まだ千冬さんが道場の門下生だつた頃は、たまに軽い世間話をするくらいあつたけど。

改めてああしてばつたり鉢合わせたりすると、なんだか気まずいものがある。

長い沈黙の後、千冬さんに姉さんの様子を訊かれたから、相変わらずですよと率直な意見を述べておいた。

相変わらず泣き虫で、甘えん坊で、けれど人一倍頑張り屋で頼りになる、とても強い人だ。

僕の中の姉さんは、昔からあまり変わつていない。

そしたら千冬さんは額に手を当てて、そうか相変わらずかつて渋い顔をした。

変わらないって、そんなに悪い事なんだろうか。僕はそうは思わない。

あれがたまらなく可愛いんじゃないですかって言つたら、すぐく変な顔をされた。なんだか釈然としないな……。

×月×日

夕飯の後に暇してたら、姉さんが電話をくれた。

相変わらずの涙声で、何を言つてゐるのか飲み込むのに時間がかかるものの……どうやら姉さんもクロエも、一応元気でやつているらしい。

まあ、当然といえば当然か。少し前までは姉さんたちも僕抜きで生活していたわけだし……してたんだよな？

二人とも三食しつかり食べてるか、ちゃんと夜に寝てるか……心配だ。

特に姉さんなんて飲まず食わず寝ずで案外やつてけちゃう人だから、平気で三食抜いちゃうし睡眠だつてとらないし……昔、僕が寝なかつた時に子守唄なんて歌つて寝かしつけようとしてくれたのはどこの誰だつたんですかね。

通話を切る前に、明日も電話していいか訊いてきたのは、意外にも姉さんではなくクロエだった。

話せたのは就寝までの短い時間だつたが、いい息抜きになつた気がする。

自分で思つていたよりも、ストレスがそこそこ溜まつっていたのかもしない。

……子守唄か。

声を聞いたらなんだか僕も姉さんたちに会いたくなつてきた。ちょっとびりホームシック。

◇

入学初日から早くも一週間が経つて、月曜日。

放課後、僕は I.S 学園の第三アリーナにいた。

アリーナの観客席は僕を含めて、生徒でいっぱいになつていて。

なんといつても今日は、一夏がセシリ亞・オルコットさんとクラス

代表の座を賭けて勝負する日。

この春に入学してきた代表候補生の実力や、噂の男子生徒の勇姿を一目見てみたい……。

そんな生徒たちの期待と熱気で、満員の観客席は盛り上がり上がっているのだ。

かくいう僕も幼なじみの初陣という事もあり、なるべく見届けてやりたいという気持ちがあった。

まあ、ね。せつかくだし、これを機にスポーツができる友だちが身近にいる気分を味わってみたいじゃない。

一夏が篠ノ之道場の門下生をやつていた頃は、まだそこまで僕らも仲良くなかったし、そもそも試合を見に行けなかつたから。

そういう意味だと、親戚なのに筈の試合も見た事なかつたんだよな……。

ちなみに姉さんが語る一夏の評価は、やっぱり男の子だよね！ってあまり参考にならない。

ただ、僕も一夏が逆境に強いのは知ってる。

文化祭の追い込みとか、凄かつたし。

今回も結局、一夏は昨日まで剣道の稽古以外何もやつてなかつたみたいだから、そこからどう試合を運んでいくのかちょっと楽しみだ……楽しみなんだけど。

(一夏、遅いな……)

開かないピット・ゲートに視線を向ける。

もう試合開始なのに、一夏がまだ出てきていなかつた。

対戦相手のオルコットさんが既に入場して、ステージの中央でスタンバつているのに対し、一夏のいるAピット側ではまだ何の動きも見られない。

周りの席から、どうしたんだろうと心配する声がひそひそと聞こえてくる。本当にどうしたんだろうね。

ひよつとしたら準備が出来てないのかもしれない。

というのも、どこかの研究機関から専用機が用意されるつて一夏本人から聞いてはいるんだけど、それがいつ届けられるかもわからな

いって話なのだ。

試合当日には間に合うつて言つてたのが、まさかまだ届いていないんじゃ……。

「見て、織斑くんが出てきたよ！」

「本当だ！」

「うわー、織斑くんの専用機真っ白で綺麗！」

と、思つていたらピット・ゲートを抜けて一夏が出てきた。
飾り気のない純白の機体をまとい、ステージ中央へ向かつて飛翔する。

「白……騎士……」

ぱちり、瞬きをする。

あれおかしいな。今、変なのが見えたような……。

白騎士は十年前、僕を病院から連れ出した姉さんが見せてくれたISの長女。

一夏のISとは、似ても似つかないはずなんだけど。

首を傾げていると、試合開始のブザーが鳴つた。

対峙する真っ白い機体と、鮮やかな青色の機体。

二人ともすぐに動く事はなく、何か会話をしている。

どんな話をしているのか、観客席にいる僕らにはわからない。
けれど、どうやらお互に譲れない結果に終わつたみたいだ。
キュイン——ツ！

オルコットさんが動く。

瞬く間もなく閃光が走り、一夏の体を貫いた。

二メートルを超す銃による、エネルギー弾の射撃。

辛うじて回避しようと体を捻り、空中で姿勢制御を行う一夏だが、
左肩の装甲を撃ち抜かれていた。

ダメージの処理が行われ、電子掲示板に表示されている一夏のゲージが減る。

ISには操縦者を守るバリアーがあつて、ダメージを受けるとシリードエネルギーが消耗される。

大抵の攻撃はバリアーが防いでくれるんだけど、さつきの一夏みた

いに、バリアーを貫通する攻撃を受けると機体そのものにダメージが入ってしまう。

このバリアーを貫通してしまう攻撃を受けてしまった時、特に当たり所が悪くて操縦者が死んでしまいかねない場合は、膨大なシールドエネルギーと引き換えにあらゆる攻撃を無効化する、絶対防御というISの能力が発動するんだって。

ただ今回の場合は、攻撃がバリアーを貫通してダメージを受けてしまっても問題ないとシステムが判断したに違いない。

バリアーによる防御を貫通したエネルギー弾は無効化されず、命中した左肩の装甲は吹き飛び破損した。

先手を取ったオルコットさんは勢い付き、狙いの絞られた攻撃に次ぐ攻撃を一夏へと繰り出す。

降り止まないレーザーの集中豪雨を前に、あつという間にシールドエネルギーを消耗していく一夏。

ちなみにISの試合は、基本的に相手のシールドエネルギーを先に0にした方が勝ちというシンプルなルールだ。
つまりこのままだと一夏は負ける。

(どうするのさ、一夏?)

僕らが見守る中、ようやく攻勢に出ようとする一夏。

オルコットさんの激しい攻撃を回避しつつ、専用機の拡張領域から呼び出したのは、

「……刀?」

片刃の近接ブレード、たつた一本だった。



×月×日

今日は一夏とオルコットさんの試合。

結果から書くと、一夏は負けた。

オルコットさんが使う大型のレーザーライフルで序盤にかなり削られて、試合の途中に展開してきたビット兵器でもつと削られて

……。

さつすが、代表候補生に選ばれるだけあるなあオルコットさんはつて感じ。素直に尊敬。

一夏の真っ白な専用機も格好イイけど、僕はオルコットさんの青い専用機の方が好きだ。

でもどうして一夏は刀みたいなデザインのブレード、それも一本しか使わなかつたんだろうか？

オルコットさんは色々と出てたし、詰め寄られた時に切り札として使つた隠し武器も格好よかつた。あれはミサイルだな。ISにミサイルがいるのかどうかつていう疑問はさておき……。

一応、ブレード一本でオルコットさんのビット兵器を撃破したり、形態移行から不意打ちをしてみたりと頑張つてたんだが……そこで発動したワンオフ・アビリティの仕様をイマイチ理解していなかつたみたいで、あつという間にシールドエネルギーが尽きてしまつた。

ギューン、ギュイーン、バーン、ドーンツ——て。

うおー、こつから逆転勝ちだあ！　みたいな、少年漫画なら完璧な流れだつただけに……本当に残念。

観戦してた皆、何が起こつたんだろうってぽかーんとしてたけど、あれつて自滅じやないかな。自滅でしょ。

一夏が使つた单一仕様能力なら僕も知つてる。

姉さんが教えてくれたんだけど、あれは千冬さんが昔使つっていた専用機のものだ。

本来、別々の専用機が同じ单一仕様能力を発動させる事はないんだけど、どういうわけか一夏たちは姉弟で同じ能力が発動したらしい。

ちなみに能力名は零落白夜。バリアーを無効化する攻撃、文字通りの必殺技。

代わりにエネルギーをバカみたいに消耗するので、連續使用するとすぐガス欠になつてしまふ、名実共に諸刃の剣なのだ。

つまり一夏は光の刃を垂れ流しにしてガス欠、試合終了という流れ……。

まあこればっかりは仕方ない。ぶつけ本番だつたんだし、最適化

も出来てない状態で戦つてたわけだし。

結果的に不完全燃焼になつてしまつただけで、試合運びや演出は最高だつたと思う。

特にあのミサイルで迎撃された時、そこからの形態移行、形勢逆転の流れは完璧だつた。

あの瞬間のアリーナの歓声といつたらもう、これつて世界大会の決勝戦だつたかな？ つて感じだつたし。

一夏もオルコットさんも凄かつた。

勝ち負けとかもう、どうでもいいんじゃない。

あ、駄目か。あれつてクラス代表の座を賭けた試合だつたんだよな

⋮。

× ×
月 × 日
鈴が來た。

鈴襲来

夜風も暖かくなつてくる四月の下旬。遅めの夕飯を頂いた僕は、ひとり食後の散歩をしていた。

コースは一年の学生寮から学園の正面ゲート近くまでを往復する、本当に簡単なもの。

寝る前に姉さんたちと電話する時間がなくなつてしまふので、あんまり長いことは歩かない。
姉さんやクロエと何を話そうか考えていたら、時間なんてあつとう間だ。

ゲート前にあるベンチに着いたら、とりあえず腰を下ろして少し休息。

今日は天気もいいし、雲ひとつない夜空に綺麗な月が浮かんでいるのが見える。

都会の明かりが強くて星があまり見られないのは残念だけど、これも都會ならではの風情なんだと思えばガツカリも薄れてくるでしょ……しないか。だよね。

「ユキオ！」

不意に名前を呼ばれて、体がびくんと反応する。

というか今の声つて……

「まつたく、こんなところでボーッとして……風邪ひくわよ」

暗闇に目を凝らして、真っ先に目につくのは大きなボストンバッグ。

次に呆れ顔とセットでため息をつく女の子。うん、ちょっと懐かしい感じ。

僕が次に言うべきなのは――

「あれ、鈴？」

「久しぶりね。元気にしてた？」

バッグからマフラーを取り出し、ごく自然な流れで首に巻いてくる。ちょっと肌寒いとはいえ、もうすぐ五月なんですが……。

「お陰様で。久しぶりに会えて嬉しい」

強いて言うなら今、チャームポイントの長いツインテールが顔に触れてちょっととこそばゆい。ああ、もう大丈夫。

「そう。ならひとまず安心ね」

ふつと柔らかく笑うと、鈴は僕の一の腕を軽く叩いた。ポンッと軽く手で触れる感じ。

「鈴は、どうしてここに？ その大きな荷物は？」

「どうしてって……。アンタがここにいるつて聞いたからに決まってるじゃない」

「……え、と？」

「どういうこと？」

「察しが悪いのも相変わらずね……」

「え……なんかごめん？」

「……もう」

ため息をついて、僕の肩を掴む鈴。加減してくれてるのかあんまり痛くない。

「いい？ IS学園は女子校なのよ、女の子しかいないの！」

鈴の言う通り、IS学園は女子校だ。何故ならISは女の子にしか使えないから。

「う、うんまあそうだね……でも一夏もいるし、従妹もいたよ？」

学園にいる男子生徒は僕だけじゃない。

一部の例を除き、原則男には使えないIS。けどまず一夏が、次に僕が。立て続けにその例外となってしまったというわけ。

「……へえ、そう。それで、同じクラスなの？」

「え、いや……違うけど」

本当は僕も同じクラスがよかつたんだけど、僕は二組で一夏と篝は一組。寮の部屋割りも別々。

「……そういうえば僕の部屋に急遽新しく生徒が入つて来るつて担任の先生からお達しがあつたけど、もしかして鈴？」

「そんな事だろうと思つた。つまり見知らぬ女の子しかいないも同然なわけ。これはアンタにとつて大きなストレスの元だわ！」

「……ま、まあそうかも？」

今はそうでもないけど、知らず知らずの内に溜まつてゐる可能性はなくもない。姉さんとの電話を日々の癒しにしちやつてるくらいだもんない……。

あれ……。でも、僕のストレスがどうして鈴の転入に繋がるんだろう。そりやあ、いたら心強いけどさ。

「今まで大変だつたでしょ。でも、もう大丈夫よ。なんてつたつて、このあたしが来たんだから！」

「うん。頼もしい」

「ま、いつか。

入学のきっかけを負い目に感じてた一夏との蟠りはこないだの試合のすぐ後に一応は解消したんだけど、今度は篠が僕を微妙に敵視してる理由がわからなくてむちや困つてるとこだつたし。

「どーんと任せなさい！……ところでさ」

「うん？」

「本校舎に総合事務受付つてのがあるみたいなんだけど」

「……ああ、あるね」

「道わかるなら案内してくれない？　この紙つきこれからじやイマイチよくわかんないのよねえ……」

鈴が上着のポケットから取り出したくちやくちやの紙には、学校に到着したら本校舎一階の総合事務受付に来てください（超意訳）と書いてあつた。略図なし。……なし？

ただでさえこの学校、敷地がバカみたいに広くて建物もいっぱいあるから迷いややすいのに……。これじや鈴が可哀想だ。

「いいよ。行こう」

「本当？じゃ、行きましょ！」

僕の手を握つて歩き出す鈴。

そうして先導する鈴を口頭で簡単に案内しながら、学園内の敷地を足早に横断する。

時刻は午後八時を過ぎ、どの校舎も灯りが消えていてちょっとぴり寂しい雰囲気だ。

この時間帯は大抵の生徒も寮にいるし、他に出歩いてゐる人の気配

は感じられない。

「…………」

「…………」

黙々と歩き続ける。

「だから……でだな……」

と、ISの訓練施設から生徒が出てくる。

鈴も話し声に気付いたようで、歩きながら視線をそちらに向けていた。

あれ、ちょっと待てよ……。やつぱりそうだ。

よくよく見ると、二人とも見覚えのあるシルエットだつた。

「鈴、一夏とさつき言った従妹だよ」

一夏と、筈。こんな時間まで特訓してたのかな。

二人は仲良く……仲良く??寮の方へ歩いていく。

「…………あつちはあつちで相変わらずみたいね」

「鈴、挨拶してかない?」

「もう遅い時間だもの。いつまでもアンタを連れ回すわけにはいかないでしょ」

それもそつか。……いや、僕がどうとかじゃなくて。

ほら、鈴も長旅で疲れてるだろうし。それならまた明日にでも、鈴が転校してきたよーいちかーって一組の教室に行つた方がいいのかもしれない。

「このまま真っ直ぐ行つて、アリーナの裏手に回つたら本校舎」「あの灯りがついてる建物?」

「うん、そう」

一緒に受付に行くと、愛想のいい事務員さんがいた。

「……はい。ええと、それじゃあ手続きは以上で終わりです。IS学園へようこそ、凰鈴音さん」

ふあん、りんいん。それが僕の幼なじみのフルネーム。

引っ越してきた小学四年から、引っ越す中学二年まで学校もクラスもずっと一緒だったのは僕の中で結構自慢だつたりする。一夏は何回かクラスが別れちゃつたからな……。

今度も鈴は僕と同じクラスだから、記録更新だね。去年は引っ越したからノーカン。

「ところで、二組つてクラス代表もう決まってるの？」

「……まだ決まつてはいないかな」

こないだ一組のお二人さんがクラス代表の座を巡つて大騒ぎしてたけど、それと打つて変わつて僕ら二組は静かに事が進んでいる。どんな手段を使ったのかはわからないけど、学校の先生方には姉さんが僕に専用機を用意してる事が既に伝わつているらしくて、二組の担任が出處をぼかしつつそれを言つちやうものだから、今は僕が暫定クラス代表という事にされているんだ。

あくまでも暫定でまだ決定してないのは、肝心の専用機がまだ届いてないから。今度のクラス対抗戦に間に合わないなら実技の得意な子に代わつてもらうように、僕からお願ひしてあるんだけどね。

「そう」

「うん。それが？」

「ちょっと……ほら、行くわよ」

——結局のところ。

予想通り僕の部屋に新しく入つてくる生徒っていうのは鈴で、全く知らない人が入つてくるわけじやなくて一安心したのもつかの間。

いつもより電話するのが遅くなつて、いつもより数倍何言つてのつかわからなくなつちやつた姉さんと、いつもより少しだけ不機嫌なクロ工を相手に僕はお喋りする事になるのだつた……。

幼なじみの野望

朝。体をやんわりと揺すられて目が覚めた。

目覚まし時計のアラームはまだ鳴っていない。

だからいつもよりもまだ早い時間なんだろうけど、昨日は早めに寝たからつらくなかった。

……あれ？ でもなんで早く布団に入つたんだっけ……。

「雪夫、起きなさい」

わあ、母さんみたいだ……。

起きろなんて久しぶりに言われた気がする。いつも自分で起きてるし。

目を僅かに開けると、鮮やかなターコイズブルーが視界に広がる。鈴が僕の顔を覗き込んでいた。鼻と鼻がくっついてしまいそうだ。朝日に照らされた長い髪から、ほんのりシトラスの香りがした。これ、僕が使ってるシャンプーの匂い？ 近いけど、ちょっと違う。もつと甘い匂いがする。

「おはよう、鈴」

「おはよう。ちょっとしたら準備はじめなさいね」

僕がまばたきしててる間に、テキパキとドレッサーの前で身支度を済ませていく鈴。ブラシで髪をとかしながら、微かに鼻歌も聞こえてくる。

ああ、そつか。今はルームメイトなんだ。昨日も鈴に早く寝なさいって、ベッドに寝かせられたんだつけ。

これまで一緒に生活していたわけじゃないから当然なんだけど。朝から鈴が近くにいるなんて、なんだか不思議な感じがする。「……ん、なによ。着替え手伝つてほしいの？」

「自分で出来る」

ブラシを置いて、仕方ないわねとでも言うように振り向いた鈴を慌てて止める。今のは流石に冗談だよね、冗談だつて言つて。

「あ、そう。まあそりやそうか……」

なんで心底殘念そうな顔するのさ、そこで……僕にだつて羞恥心く

らいあるんだからな。

鈴がいつもの髪留めを手に取るのを見届けて、遅ればせながら僕もベッドから出る。

「お、ちょうどいいわね」

「んあ」

シャワールームで洗顔と着替えを済ませた後、鏡を見ながら歯を磨く僕の後ろから、朝の身支度を終えた鈴がにゅつと手を出してきた。ちょうどいいって、何が？

「貸しなさい。仕上げやつたげるから」

「……？」

「ほーら、早く」

差し出した手をフリフリさせる鈴に、手にしていた歯ブラシを渡す。

すると鈴は僕の手を引いて、ベッドに腰掛ける。

促されるまま膝枕の体勢になり、あれよあれよという間に小さな手が僕の顔に触れていた。

「あたしがいない間に、虫歯なんて作つてないでしようね？」

「ない」

「ふーん、どうだか……まあいいわ。口開けなさい」

おずおず口を開くと、歯ブラシと小さな指がすつと口の中に入つてくる。なんでこんな事になつてるんだろ。

僕も姉さんにせがまれて歯磨きする事はあるけど、人にされるのは久しぶりだ。

最近だと、歯医者さんの歯磨き指導？……ならそんなに久しぶりでもないか。

「ま、アンタにしてはよく磨けてるわね。この調子で頑張んなさいよ」

「ん、ー」

唸つて抗議するも、大した効果は見られない。というか鈴はこの程度の威嚇なんて気にしない。

そもそも鈴の中の僕つてどうなつてんだろ。そんなに虫歯が出来そうな感じなの？　ぱつと見て不衛生つて事？……それはなんか

ちよつとショック。

「……、んなどこかしら。はい、お疲れさま」

「…………」

無言で洗面台に向かう。だてに歯磨き指導を受けてはいないのだ。
……まだ褒めてもらつた事ないけど。

歯医者さんと同じで、口をゆすいだら歯磨きは終了。
シャワールームを出ると、鈴が待ち構えていた。

「さ、朝ごはん食べに行くわよ」

「わかった」

昨日事務員さんから簡単な案内はされたものの、今朝も僕が手を引かれながら鈴を学生食堂まで案内する事に。

まあ一階に行けば、探さなくてもすぐ見つかると思うけど。こゝは一緒に行く事にも意味があるはず。

「あ、あれ宮田くんじやない？」

「ほんとだ宮田くん」

「一緒にいる子だれだろ～？」

見知らぬ生徒が気になるのか、転校生だと気付かれたのか。すれ違う生徒がみんな鈴を二度見している。

もつとも、廊下に出てる生徒の数自体が少ないから騒ぎにはならなかつた。小学五年に鈴が転校してきた時は凄かつたからな……。

そのぶん無用ないざこざとかもあつたけど。お陰で鈴とは仲良くなれたから、ある意味いい思い出なのかもしねりない。

「あ、そうそう。あたし二組のクラス代表になつたから」

「……そう？」

「そうなの」

しつとそんな事を言う鈴。いつの間に……。

「……一夏、いなさそうね」

食堂の中を覗いて、鈴が呟いた。

時間的に僕らが来たのがまだ少し早いくらいなので、いつもは生徒で賑わっている食堂も今だけは空いている。当然ながら一夏の姿はないし、筈もない。

「この後、一組に軽く顔出しておこうと思つてゐるんだけど」

「ん。なら僕も行く」

僕が券売機から好きなメニューを選んでる間に、横から鈴の手が伸びてきて、あつという間にボタンを押してしまう。そのまま出てきた券一枚を、鈴は担当のおばちゃんに渡した。

「朝は白いご飯と焼き魚とお味噌汁がいいんでしょ」

「よく知つてるね」

「……アンタが言つたんじやない」

「そうだっけ？」

待つてゐる間に昔話に花を咲かせる。昔つて言つても、古いものでほんの三、四年前くらいの話なんだけど。

「あ、出てきたわよ」

「本当だ。ありがとうございます、いただきます」

お盆を受け取つて、テーブルに移動する。

鈴が選んでくれたのは鮭の塩焼き。こんがりと焼けた大きな切り身が、お皿の上で圧倒的な存在感を放つてゐる。
ちなみに鈴は朝からラーメンだ。

「時間はあるんだし、アンタはゆつくり食べなさいよ」

「うん。そうする」

「大きいから大丈夫」

「……そ」

そんな会話を交えつつ、箸を進める鈴。ラーメンだけどレンゲは使わない派なんだつて。僕も使わないかな。

「本当に手伝わなくて平氣?」

「……平氣、平氣」

鈴に押し切られて小骨を除いてもらうまで、あと五分……。

「織斑くん頑張つてね!」

「フリー・パスのためにもね!」

S H R 前の空き時間。鈴と二人で廊下を歩いていると、一組の教室からそんな会話が聞こえてくる。クラス対抗戦の話かな。

一位のクラスには学食デザートの半年フリー・パスが優勝賞品として配られるんだ。優勝の栄誉はさておき、僕もフリー・パスは気になつてるんだよね。

「今のところ専用機を持つてるクラス代表つて一組と四組だけだから、余裕だよ」

「おう」

そんな楽しそうな声を聞いた鈴は弾かれるように早足になり、さつと入り口前に滑り込んだ。ちよろちよろつて、オコジョみたいで可愛い。

「——その情報、古いよ」

腕を組み、ドア枠にもたれかかりながら言い放つ。

「二組も専用機持ちがクラス代表になつたの。そう簡単には優勝させないから」

そうドヤ顔で言う鈴。え、鈴も専用機持ちなの?

それは僕も知らなかつたな……あ、だからクラス代表になつたのか。納得。

「鈴……？　お前、鈴か？」

鈴の背中を歩いて追いかける僕の耳に、困惑した様子の一夏の声が届く。まあそうなるよね。僕もびっくりしたし。

「そうよ。中国代表候補生、凰鈴音。今日は宣戦布告に來たつてわけ」「何格好つてるんだ？　すげえ似合わないぞ」

「んなつ……!?　なんて事言うのよ、アンタは！」

これこれ。いつもの二人つて感じ。

……と、僕のすぐ隣を誰かが通り過ぎようとする。

「あ、織斑先生」

「おはよう……もうS H R の時間だ、教室に戻りなさい」

「おはようござります。鈴を連れて行きます」

鈴に駆け寄り、肩を指でつつく。

「鈴、もう時間。教室に行こう」

「え、もう？……仕方ないわね」

物足りなさそうな鈴だけど、僕の後ろからやつて来る千冬さんを見て口を噤む。

「お昼に学食で集合ね！ わかつた、一夏！」

「幼なじみ再集結……うん、いい感じ。一夏、またね」

「ほら、早く行くわよ！」

「あ、うん」

何が何だか理解出来てない様子の一夏に手を振つていると、鈴に空いてる方の手を掴まれてまた引っ張られる。あつという間に二組に着いた。

「でも鈴、なんで宣戦布告？」

「決まつてるじやない。自分に活を入れるためよ」

「本気で優勝を狙つてるんだ」

「……まあね。あたしは強くならなくちゃいけないんだから」

「言いながら、鈴が僕の手を握る力を強くする。」

「そういえば。雪夫、甘いもの好きなんだつけ？」

「人並みには。こここのデザート、美味しいから」

「……………ますます負けられないわ」

「…………？」

こうして、今日が本格的にはじまつていく。

この後鈴がS H Rで簡単な自己紹介をして、朝に僕らが一緒にいるところを見かけたクラスメイトに質問攻めを受け、それに対して鈴があつさり幼なじみだと答えてちょっととした騒ぎになるのはまた別の話……。

席も僕の後ろだし。よろしく、鈴。

【悲報】幼なじみ再集結記念【失敗】

「待つてたわよ、一夏！」

お昼休み。食堂に入ってきた一夏を見て、鈴がこつちこつちと手を振る。

本当は券売機の近くで待つつもりだったんだけど、僕ら二人があそこにいたら邪魔になりそうだつたし、それなら先に席を確保しておいた方がいいかなって事になつたんだ。実際、この時間帯の食堂は人の行き来が多いからね。

「おう。待たせたか？」

「まあまあね。……にしてもアンタ、ぞろぞろと連れて来すぎよ。幼なじみ再集結記念だつて言つたじやない」

呆れた様子で一夏に視線を向ける鈴。

日替わりランチのお盆を持つて席にやつてきた一夏の後ろから、一組の生徒数人がついてきている。筈やオルコットさんも一緒だ。「まあそろ言うなつて。飯は大勢で食べた方がうまいだろ？」

「……ま、いいわ」

口ではこう言つてるけど、実は最初からこうなる事を予想していて、僕らはテーブル席を確保していた。お陰でちょっと白い目で見られたりもしたけど、まあ必要経費かな。

「それにしても久しぶりだな。ちょうど丸一年ぶりになるのか。元気にしてたか？」

「元気よ。そつちも元気そうでなによりつてどこね」「まあ、元気なのが取り柄みたいなもんだからな……」

お、一夏の今の返しは僕が一度でいいから言つてみたい日常会話のフレーズベストスリーに入るやつだ。ちなみに一位は我が生涯に一片の悔い無し——。

「いつこつちに帰つてきたんだ？　おばさん元気か？　いつ代表候補生になつたんだ？」

「質問ばつかしないでよ。アンタこそ、なにＩＳ使つてるのよ。ニュースで見た時びっくりしたじやない」

お互の近況について話が弾むのは、きっと仲がいい証拠。一夏も鈴も、表情がいつもより輝いて見える。

「一夏、そろそろどういう関係か説明して欲しいのだが」

「そうですわ！ 一夏さん、まさかこちらの方と付き合つてらつしやるの!?」

と、蚊帳の外にされて面白くなさそうな箒にオルコットさん。顔が険しくてちょっと怖い。

二人が特別なお付き合いをしてるつて事はないと思うけど。オルコットさんや他の生徒は、興味津々といった様子で一夏を見ている。

「一夏とあたしが？ ……ないない、ありえないって」

「そうだぞ。なんでそんな話になるんだ。ただの幼なじみってだけだし、それに鈴は……」

「…………」

「うおつとと。……なんでもない」

「……命拾いしたわね」

……？ なんだろ、今の変な間は。
「幼なじみ……？」

あ、そつか。箒は会つた事ないんだよね。

「えつとだな。箒が引っ越していくのが小四の終わりだつたら？ 鈴が越してきたのが小五の頭で、中二の終わりに一度国に帰つたから、こうして会うのは一年ちょっとぶりだな」

首を傾げる箒に、一夏が搔い摘んで説明をする。

「で、鈴。こっちが箒。ほら、前に話したる。小学校からの幼なじみで、俺の通つてた剣術道場の娘。あと、まあ一応雪夫の従姉妹だな」「ふうん、雪夫のね……。そうなんだ？」

興味なさげな返事をする鈴だけど、その目はしつかり箒を見ている。箒はなんだか居心地が悪そうだ。

「初めまして。これからよろしくね」

「…………ああ。こちらこそ」

二人の間にちょっと歪な空気が流れる。

「ンンンッ！ わたくしの存在を忘れてもらつては困りますわ。中国

代表候補生、凰鈴音さん?」

「……誰?」

「なつ!? わ、わたくしはイギリス代表候補生、セシリ亞・オルコット
でしてよ!? まさかご存知ないの?」

「うん。あたし、国とか興味ないし」

「な、な、なつ……!?

あらら……。みるみるうちに顔が真っ赤になつていくオルコット
さん。鈴が涼しい顔してるから、そこがすぐ対照的。

「い、い、言つておきますけど、わたくしあなたのような方には負けま
せんわ!」

「そ。でも戦つたら勝つのはあたしだよ。悪いけど」

にべもなく言い切る鈴の表情には、僅かな陰りもない。こういうと
こがすごいんだよなあ鈴は。でも、同時にその自信が敵を作りやすく
もあるんだ。

「…………」

「い、言つてくれますわね……」

篝が手を止め、オルコットさんも苛立つた様子で拳を握りしめる。

二人ほどあからさまではないけれど、相席した一夏の連れも思う事
があるのか神妙な表情を浮かべていた。

鈴は一人から決して目を離さない。

「あたしは負けられない。負けないほど強くなるの。雪夫のためにも
ね……」

え、僕?

「……そうでした、ところでそちらの方は? さつきから一言も喋つ
ていませんけれど……」

オルコットさんにつられて、この場にいる全員の視線がこつちに向
く……なんだか照れちゃうな。

つと、照れてる場合じやない。誰つて訊かれたんだから簡単な自己
紹介くらいしとかないと。

(え、と……)

「こいつは宮田雪夫。俺の幼なじみで、篝の従兄弟だ」

「……よろしく」

「む、無口な方なのですね……」
うどんを一口にする。

あーあ、一夏に言いたい事全部言われちゃった。
僕が特別無口つてわけじやなくて、単に言う事がもうないだけなんだよ。

皆、僕が何か言う前に話を進めてくんだから。

「篠ノ之さんの親戚……。という事は、篠ノ之束博士の……」

「ん、姉さんなら元気だよ。それが、どうかした?」

「あ、いえ、なんでも……」

とか言いつつ、箸をちらちらと見るオルコットさん。重たい空気を
そつちから感じる。

うわ、嫌だ……。

「…………」

なんで僕は箸に睨まれてるんだろ……あれかな、実妹を放つたらか
しにして姉さんが僕にばっかり構つてるから不貞腐れてるのかな。

ああ、でもそう考えると理屈が通る気がする。姉さんにもつと妹の
相手をしてあげてって言つとかないと。

「あーっと。り、鈴、親父さんは元氣にしてるか? まあ、あの人こそ
病氣とは無縁だよな!」

「……うん、元気——だと思う」

僕からどんぶりを掠め取つて、勝手に具の餅を箸で切り分けはじめ
る鈴。

あー、力うどんのメインがあ……ちょっと、今大事な話してたん
じゃなかつたの?

なんかそんな雰囲気してたよ、一夏たちも目が点になつてるよ。

「それよりさ、今日の放課後つて時間ある? あるよね。久しぶりに
また、三人でどこか行こうよ。ほら、駅前のファミレスとかさ」

「鈴、そこ潰れたよ」

「あ……。そう。そうなの……」

「去年ね」

いつもの四人で勉強会とかに結構使つてたんだけど、いきなり閉店のお知らせが出て、そのまま潰れちゃったんだよね。

あの時はびっくりしたな……で、その後は結局僕の家に落ち着いたんだつけ。

「ふうん。意外と寂しいわね……。はい、これちゃんと噛んで食べるのよ」

「介護かな？」

だから、白髪頭だけどまだおじいちゃんじゃないんだつてば。

そりや油断してたら若い人でも詰まらせるよ、でも僕そんなうつかりじやないとと思うんだけどなあ。

「それなら、最悪学食でもいいから。……ほら、ここ一年の事を一夏、

アンタから聞いときたいの」

「うーん。去年は俺も受験勉強で忙しかつたしな……。でもまあ、そ
れくらいなら」

お、一夏も乗り気になつてきた？

「——生憎だが、一夏は私とISの特訓をするのだ。放課後の予定は埋まつていてる」

と、筈。

あらら……一夏つてばすっかり筈のおしりに敷かれてらつしやる。
「そうですわ。クラス対抗戦に向けて、特訓が必要ですもの。特にわ
たくしは専用機持ちですから？　ええ、一夏さんの訓練には欠かせな
い存在なのです」

おや？　様子が変だと思つてたけどこれ、もしかしてオルコットさ
んも？

やるねえ、一夏。さすがいい男だ……怖い女の子に挟まれてるのに
は同情するよ。

「じゃあそれが終わつたら行くから。予定空けといてよね。……雪
夫、口開けて」

「……？」

餅がもつちもち……なんてくだらない事を考えつつ、細切れにされ
た餅を食べながら会話がまとまつていくのを眺めていると、横から鈴

が箸を出してきた。

「……！」

「はい、ナルト好きでしょ。食べたら行くよ」

「ん」

本当、鈴って僕以上に僕の事を知ってるよね。



五月。来週からいよいよクラス対抗戦だというそんな平日の夕方に、顔を真っ青にさせた先生たちが僕の周囲を行き交っている。
(誰かの特訓以外でピットに入るは何気にはじめてだな……)

僕がいるのはとあるアリーナのAピット。今日はここだけ生徒に解放されず、アリーナには先生しかいない。

本当は鈴もついてきたがつっていたんだけど、あんまり先生に無理を言つてはいけないから今日は一夏たちの方に行つてもらつた。

「こ、この中です……」

「ありがとうございます」

「い、いえ。……わ、私はもう行きますが、質問などはありますか？」

「大丈夫です」

「そ、そうですか。な、何かあつたら近くの先生に訊いてみてください！」

いや、先生、この辺に人いませんけど……？

ここまで案内してくれた先生が足早に立ち去り、ひとまずここ一帯には僕と大きなコンテナだけが残された。

……そう、なんでも今日のお昼頃に姉さんから僕の専用機が届いたというのだ。

(姉さん、言つてくれればよかつたのに……)

昨日の電話ではそんな事ひとつ言もなかつた。

多分、姉さんなりのサプライズだつたんだろうけど、思いつきり時間ズレちゃつてるよ……先生にも迷惑かけちゃつてるし、謝つとかないとね。

なんていうか、生徒宛の大切な荷物を預かる気苦労つてやつなのかな。ここに来るまでにすれ違った先生の顔みんな蒼白だつた。

きっと责任感の強い先生ばかりで、生徒の荷物に何かあつちやいけないつて、お昼から神経すり減らしたんだろうな。お疲れ様です。

「…………」

目の前にあるのは、一般的なものより一回り近く大きな金属のコンテナ。正面に液晶パネルがあつて、その下にあからさまなタッチパネルがある。——というか、『↑ Touch me !』って張り紙がされてる……。

「……オープンセサミイ」

冷たいパネルに手のひらを合わせると、カシユツカシユツと空気の抜ける音がした。同時に中からモーターが唸る音も聞こえてくる。高まる期待感……口マンだね。

『パ、パカパーン！ サプラア～イズウ！』

「……姉さん？」

パッと液晶にご機嫌な姉さんが映し出された。

おー、開幕一言目がマトモな姉さんを見たのはかなり久しぶりだ。『おつひさー、ゆつきー！ やーやー、愛しの東さんだよ～元気してた～？』

「う、うん……？」

姉さん、なんか様子が変だな。

機嫌がいい時は大抵テンションが高い方だけど、こんな他人行儀な感じじやないし……ていうか、久しぶりつて毎日電話してるじやん。『さて、挨拶もそことこにしどこつか。——で、まだそこにゆつきー以外の人間がいるなら出てつてもらえるかな？ 今、東さんとゆつきーが家族水入らずでお話しようとしてるんだけど？ ねえ？』

「……いなideど

金属の箱からニユツとうさぎ耳のような装置が飛び出して、回転しながら淡い光を照射し辺り一帯を照らはじめた。——で、何これ？ 一通り舐め回すように光を浴びせた後、うさぎ耳はまた箱の中に引っ込む。何だつたの今の……。

『うんうん。賢い選択だね……はふう』

「お？」

ええ……」

あ
いつもの姉さんだ
……

さつきまでとは打つて変わつて、堰を切つたように泣きはじめる姉さん。ダムの決壊も川のせせらぎに感じられる勢いで、大粒の涙を絶え間なく流し続ける。

あ、あ、あ、あ、あ、あ、

「姉さん、結構周りに響いてる」

『は、うう、い、……』これ録画だよお、……

これがカートゥーンアニメとかなら、姉さんの上半身が画面から出てきてるところだ。

……というか録画だつたのね、これ。

「ボリュームは……タツチパネルで調節できるよお、……イ、アホノヅヤツクもあら、おう……」

「あ、うん……」

万三 姫の心は泣き止むな

のお話を気長に聞くことにした。

クラス対抗戦の日程では、一回戦の組み合わせは鈴と一夏。なんだか波乱の予感がする……なんてね。

クラス対抗戦

クラス対抗戦初日の朝。いつもの制服に着替えた僕は、学園の正面ゲート前にいた。

ちよつと早めに目が覚めたから、ご飯の前に朝の散歩。傍には同じくらいに起きた鈴もいる。一人して夜は早く寝たもんな。

「今日も晴れそうね。いい事だわ」

「そうだね」

対抗戦初日だし、なんなら一回戦から出場する鈴だけど、『頑張つて』とか『いよいよだね』とか。そういう特別感のある話はもう昨日までに沢山してるから、今朝は僕たち二人とも普通の会話を楽しんでいた。

「今度の休み、二人で買い物にでも行かない？」

「買い物？」

「アンタの服を見に行くの。ついでにあたしも新作チエツクしどうかな……」

女の子は買い物好き。それは、鈴でも変わらない。

転校してきた時に見た、大きなボストンバッグひとつでどこにでも行けるフットワークの軽さを誇る鈴は、買うよりも見るのが好きなタイプの女子だ。荷物は増えないからその分普通の子より楽だと思う。まあ、あくまで弾たちと見た映画の女の子から学んだ感想だけど。あれ、付き合わされてる男の子が可哀想になる勢いだつたからな……。僕は幼なじみが鈴でよかつた。

「服ならあるよ」

「……それ、いつも着てる上下黒のシャツとチノパンの事？」

「駄目？」

「ダメではないけど、ちよつとくらい冒険してもバチは当たらないはずよ」

腕組みをして、片目を閉じながら僕を見る鈴。うーん、そういうものなのかな。

でもあのセット、安いから気に入ってるんだよね。洗濯機に放り込

んでもちやちやつと洗えるし。

「じゃ、週末は買い物に決定つて事でいい？」

「うん。楽しみにしてる」

「あたしもよ」

そんなわけで週末の予定が決まった。

それはクラス対抗戦初日の、朝の事だつた。



一回戦、一組『織斑一夏』対二組『凰鈴音』。

開始から既に十分。試合は二組、鈴音の優勢で進行していた。

「よくかわすじやない。あたしの衝撃砲『龍咆』は砲身も砲弾も目に見えないので特徴なのに」

仕切り直しとなつたタイミングで、鈴音が感心した様子で一夏に語りかけた。

実際その通りだつた。甲龍^{鈴音}の衝撃砲は、対戦相手である白式^{一夏}をたしかに苦しめている。

が、しかしそれ以上に、鈴音の操縦者としての能力が想像していたよりも遥かに高い。操縦者と機体が想像以上に噛み合つているのだ。武器の相性、機体の性能というカンタンな言葉では、決して片付けられない格差が二人の間にあつた。

「鈴」

「……なによ？」

「本氣で行くからな」

そんな状況の中、折れる事なく覚悟を決めた表情を浮かべる一夏。絶望的な戦況だが、気持ちでは負けていない。相手を見据える瞳には、そんな熱い思いが込められていた。

「はっ、当然でしょ。ここで手を抜くなんて絶対に許さないわ。全力でかかるて来なさい。その上で叩き潰してあげる……」

両刃の青龍刀をバトンのように一回転させ、言葉通りに迎え撃つべく構え直す鈴音。

不敵な笑みに妖艶さを滲ませ、幼い容姿からは想像もつかないほど大人びた雰囲気を漂わせる。

「あたしにはね、背負いたいものがあるの。今のままじゃまだ全然、頼りないかもしれない」

「ああ、よく知ってるぜ」

「そうね……それにきつとここれは、あたしたちの独りよがりな望みね」
それはオープン・チャネルの通信を聞いている、対戦相手や教師にしか聞こえない告白。

きつとアリーナのどこかで自分たちを見ている想い人へ抱く気持ち、その再確認。

日を追う毎に高まる“してあげたい”、“やつてあげたい”気持ちに果てはない。

「——けど、その願いのためにあたしは強くなる。何にも、誰にも負けないほど強くなる……！」

同時に己への発破もある独白は鈴音の心を確実に、しかし冷静さを見失わない程度に昂らせた。

「行くわよ！ 今は雪夫が、あいつが見てるんだ……勝ち負け以前に、こんなところで無様は晒せないっ！」

「それなら俺だつて、あいつの前でダサいとこは見せられねえよな！」
鈴音が吼え、一夏が加速姿勢に入る。

先に動いたのは意外にも一夏。ここ一週間で身につけた『瞬時加速』という加速テクニックを利用し、この技能を一夏が使える事をまだ知らない鈴音に奇襲を仕掛けたのだ。

繰り出されるのはシールドを無効化する必殺の一撃、名は『零落白夜』。

「うおおおおつ！」

鈴音に一夏の刃が届く、その瞬間、
ズドオオオオンツツ——!!!

突然、大きな衝撃がアリーナ全体を揺らした。

「な、何だ？ 何が起こつて……」

困惑する一夏の目の前で、もくもくと濃い煙がたち上る。

アリーナの遮断シールドを貫通し、『何か』がステージに飛び込んできた。

「雪夫……っ」

煙の中に熱源、それは所属不明のIS。ISと同じ性質の遮断シールドを貫通する攻撃力を有した不明機が乱入してきたのだ。

咄嗟にハイパーセンサーを使い、想い人の所在を探る鈴音。どう動くにしても彼の位置を知つておきたい。

『一夏、試合は中止よ。ピットに戻つて早く!』

同時に混乱する一夏へ、冷静にプライベート・チャネルを飛ばす。「なつ——お前はどうするんだよ!?

返ってきたのはオープン・チャネルによる通信。一夏はプライベート・チャネルの開き方がわからなかつたのだ。

「あたしがあれをどうにか——時間を稼ぐから、その間に逃げなさい!」

「逃げるつて……。女を置いてそんな事できるか!」

「馬鹿、わからない事言わないの! アンタの方が弱いんだからしうがないでしようが!」

ステージ中央から目を離さず、鈴が諭すように突き飛ばした物言いをする。

「別に、あたしも最後までやり合つつもりはないわよ。こんな異常事態、すぐに学園の先生たちがやつてきて事態を——つ」

途中、言葉を切つた鈴が上空に緊急回避する。

そのまま、煙の中から空間にかけて熱線が走る。ビームの砲撃だ。

「思つたより出力が高い……っ。一夏、早く!」

セシリリアのレーザーライフルよりも破壊力のある攻撃……。

ハイパーセンサーの解析結果を確認し、軽く歯軋りをした鈴音だが、すぐに体勢を立て直して衝撃砲を構える。

「アンタに何かあつたら雪夫が悲しむでしょうが!」

「それは……! 来るぞ!」

「——ああつ、もう!」

次の瞬間、煙を晴らすようにビームが連射され、所属不明のISが

ふわりと浮かび上がってきた。

「なんなんだ、こいつ……」

姿を目視した一夏。不明機は手が異常に長く、そのシルエットはまさに異形のそれだった。

まず『全身装甲』が目を引き、次にその大きさ、肩と頭が一体化し首のない上半身、各部オプションが歪さを演出している。

「お前、何者だよ」

「…………」

一夏が呼びかけるが、当然ながら不明機は応答しない。

警戒する二人を剥き出しのセンサーレンズに捉え、不気味に沈黙を貫く。

『織斑くん！ 凰さん！ 今すぐアリーナから脱出してください！ すぐに先生たちがISで制圧に向かいます！』

そう通信を入れたのは管制室にいる副担任の真耶だが、足止めを提案した鈴音よりも先に首を横に振つたのは一夏だつた。

「——いや、先生が来るまで俺たちで食い止めます」

鈴音の言葉を借りるわけではないが、時間を稼ぐ。

シールドを突き破るほどの火力があるISが乱入してきたのだ。それこそ自分たちが相手をしなければ、観客席にいる人間——鈴音に言わせれば彼に被害が及ぶ可能性がある。そう判断しての返事だった。

それに、一夏にはある思いもあつた。

「鈴、俺に何かあつたら雪夫が悲しむつて言つたよな」

「……言つたけど。当然でしょ。つらい時も楽しい時も一緒にいた、幼なじみなのよ？」

「馬鹿だな。それ、お前も同じだぜ？ 鈴に何かあつたら、雪夫はきっと悲しむ。そんなの許せねえよな？」

「それは……」

「——だから、俺はお前に背中を預ける。お前は俺に背中を預けろ」

二人で仕留めるぞ。暗にそう言い、一夏は雪片を構える。

『だ、ダメですよ織斑くん！ 生徒さんにもしもの事があつたら――』

二人が続きを聞く事はなかつた。不明機——敵 I-S の突進を回避し、横並びに位置取りをする。

「二夏、やると言つたからには最後まで付き合つてもらうわよ。あたしが衝撃砲で援護するから、合わせて突つ込みなさい。他に武器、ないんでしょ？」

「その通りだ。じゃあ、それでいくか」

互いの武器の切つ先を当て、作戦通りに飛び出す。

ドオオオオオンツツ——!!!

「何がつ??」

「——つ雪夫！」

落雷のような音と共に降り注いだのは、絶望。上空からアリーナ目掛けてビームの砲撃が落ちてきた。

不明機は二人の目の前にいる。だが今の攻撃は、アリーナのシールド外から行われていた。

つまり、それらが意味する事は、

「新手！ それも数が多い！」

「あいつだけじゃなかつたのか……！」

ゆつくりと降りてくる複数の不明機。数は四、最初の機体を含めて五。

いずれも似たようなデザインだが、中には一部形状の違う機体も混ざつてている。

一機でも厄介だというのに、まさかの増援……。

「鈴、一機抜けた！」

一夏の焦つた声が、鈴音の冷静さをかき乱す。

「こなくそ、どこへ……っ!!」

咄嗟にハイパー・センサーを使って機影を追う鈴音だが、その行き先に目を疑つた。

さつき自分が確認した、雪夫の席がある位置だ。

頭部が歪に肥大化した不明機が、気味の悪いレンズで雪夫をじつと見ていた。

「雪夫、雪夫がつ！」

「鈴、あぶねえ！」

意識がそちらに向いた瞬間、襲い来る光の砲弾。

神がかり的な反応速度で回避する鈴音だが、既に平静を失いつつあつた。寧ろ僅かにでも冷静な思考が出来ていて「やつてくれるじゃない……。どこの誰だかは知らないけど、あいつを狙うなんて目だけは利くみたいね……」

ふつふつと湧き上がる怒り、焦り。

目の前の障害を排除しなければ——。そう考え、鈴音が鋭く切り込む。

次の瞬間、

ガギン、ツツツ——!!

鈴音の背後から物凄い勢いで黒い塊が飛来し、立ち塞がる不明機の内、一機を諸共吹き飛ばす。

「……何？」

塊の正体は、あの頭でつかちな不明機だつた。

同士討ち？ いや、違う。それでは直前の凄まじい質量が機体にぶつかるような音の説明がつかない。

意識をめぐらせる鈴音。と、視線が止まる。

その先にいたのは——

「あれは……」

目を見張るような純白の全身装甲に、毒々しい真っ赤な光を放つライン。足がない、見る限り腕もない。

巨大かつ、縦にスラリと伸びるボディ。

広い胸のような部位に、単眼のレンズセンサーを備えた頭らしきユニット。

肩の位置にはスラスターや砲口を備えた大きなバインダーがあり、ボディの両サイドを隠すように閉じている。腕がない。

スカートのような装甲から生えた腰から下はミノムシのようで、改めてそれに足がない事を物語る。

さらにその上から、花弁のようにも見えるがそんな可愛らしいものではない五機の巨大な非固定ユニットが、盾のようにゆつくりと旋回

を続いている。

全体的に、乱入してきた不明機らとはまた違うシルエット。
しかしおおよそ I Sとは思えない機体が、そこにはいた。

月の兎（前）

「な、な……っ」

観客席のシールドを突き破るようにして現れた純白のISに、ピットからアリーナの様子を見ていたセシリ亞の表情が驚愕の色に染まる。

「なんですか、あれは!?」

「……宮田の専用機だ」

その咳きに千冬は答えた。モニターを見つめる目は険しく、表情も優れています。

実際見ていてあまり気分のよいものではない。無関係を装うにはあまりにも知りすぎている千冬にとつて、あれはそういう類いのものだ。

『玉兎』。あいつ……篠ノ之東が手がけ、構想の段階で凍結させていた機体——

先週近海に投下され、極秘裏に学園へと運び込まれた。それも、IS委員会を脅しに束本人が直に訪れるという、最悪なオマケ付きで……。

自分のお気に入りに下手な真似をしたら、もれなく全てのISコアを機能停止させる。そう、笑いながら東は言つたらしい。

雪夫は自分の物だと。どの国にも所属しない、縛られない存在なのだと、そう世界に認めさせたのだ。

『東、どういうつもりだ?』

『んふふ。……私の最高傑作をなにとぞよろしくね、びしつ!』

念のために連絡を入れてみれば、そんな言葉ではぐらかされた。
(最高傑作とは、どちらを指して言つたのか……)

千冬の脳裏に浮かぶのは食えない少年の後ろ姿。白騎士事件という度を過ぎた茶番を束と共に企て、今もなお連絡を取り続ける世にも珍しい強化人間。

再び世界レベルの茶番に付き合わされていると哀れに思うべきか、過去の共犯者としての側面から目を逸らさず直視するべきか。

……いや、あれを可愛いと言い切る神経をまず疑うべきだらうか……。よもや洗脳ではあるまいな。

「篠ノ之東博士の……」

束と聞いてごくりと喉を鳴らすセシリア。この少女がどういう認識であれを見ているのかは知らないが、今回の不明機襲撃を含め、あの機体は凶兆に違ひなかつた。



「大変な事になつてきたな……」

鈴と一夏の試合中、アリーナの外から見知らぬISが飛び込んできた。それも遮断シールドを破つて、次々と。参つちやうよね。

観客席にいた生徒はみんなパニックでもう大変。我先に逃げようとするけど、どういうわけか扉がロツクされてて開かないときてる。まあ、僕は元から人酔いしてて急には動けそうにないんだけど。まさか一夏とオルコットさんの試合以上に席がすし詰め状態になるだなんて……。学校行事の盛り上がり方をちょっと甘く見てた。

(……なんて、反省してる場合じゃないか)

あの数を相手に鈴たちが長く時間を稼げるとは思えない。現に今、二人の隙について一機こつちに向かってきて……。うん?

「…………」

頭の大きなISが、僕の目の前で静止する。

……大きな隙を晒していた。

「うわ……。俺に興味あるの?」

「…………」

返事はない。けれど、センサーがチカチカと明滅してゐる様子から僕を観察しているのはわかつた。

こんな状況で人を観察するのって、今から悪い事しようとしてますつて言つてるようなものだよね、そうだよね。……じゃあ有罪つて事で。

「あ、そう。俺はないよ——つ!」

姉さんがくれた専用機を展開、装備する。……普通はこの表現でいいんだけど、僕の場合は乗るの方が正しいのかな。ま、いつか。

ガギン、ツツツ——!!

周囲をゆっくりと旋回している盾のような非固定ユニットを加速させ、目の前のISにぶつける。これ正式名称はハードスケイルっていうんだけど、相手がこれを知つておく必要はないよね。

肝心の攻撃はなかなかいい当たりだったのか、頭のでかいISはその頭をへしやげさせながら元いた方向へ吹っ飛んでいった。……あ、味方にぶつかった。

「雪夫！ 雪夫なの?!」

「わ、鈴……」

ああそっか。今ので学園に登録していた玉兎の識別情報が鈴たちのISに確認されて、無接続状態の回線がオープン・チャネルに繋がったんだ。……びっくりした。

「よかつた……。怪我はない、大丈夫？」

「平気。怪我したのは向こう」

「みたいね。……その機体はどうしたの？」

「専用機。姉さんが用意してくれた」

「……そう、束さんが……」

会話しながら三機のISを相手取る姿は素直にすごいと思うけど、あんまり無理しないでよ。本来は戦闘中に喋つてる余裕がない一夏の方が普通なんだからね。

「あの人気が雪夫のためだけに用意したのなら、ヘタな代表候補生が乗るISよりは動けるはずよね。……いけそう？」

「不意打ちだけど、一機落とした」

「……そうね。雪夫、援護頼める？ なんならあたしたち囮にして倒しちゃつて！」

「任せて」

機体を少し傾けて、敵ISを正面に捉える。ついでに搭載されている武器の安全装置も全て解除しておこう。解禁解禁。味方がいる状況でも使えるシンプルな武器は、左右のバインダーに

搭載されているビーム砲のみ——。

「鈴、一夏。当たらないように」

「了解。一夏、全力でいくわよ！」

「お、おう。了解？」

直後、収束されたエネルギーが青白い筋を引いて閃き、敵ISの装甲に突き刺さる。……シールドバリアーがない？

僕が抱いた違和感を他所に、胸や腹の装甲を貫かれたISはそのまま沈黙し、地に落ちる。絶対防御が発動した気配もない。

……うん。機能停止したのに解除される様子もないのは、やっぱり変だ。

思えば、さつきの頭の大きなISもいくらハードスケイルのチャージングが強烈とはいえあつさり壊れすぎだし、ぶつかった敵も沈黙しちたまま動きそうにないのはどういう事なんだろう。

「雪夫、反撃に気をつけて！」

今の攻撃で脅威度がグンと上がったのか、鈴たちを一旦無視する残りの二機。

こちらに向ってきた両腕からビームが逆り、これを回避する事に全神経を集中させる。

（不思議と苦はないけど、難しい……）

ISは基本的に人体を延長した感覚で操作するものなんだけど、僕の専用機『玉兎』は違う。自分がどうしたいかをより明確にイメージする必要がある。

何故なら、玉兎には人のような手足がない。形も大きさも違えば、逆に人にはないものがあつたりもする。ハードスケイルも盾としての役割があるとはいえ馬鹿みたいに大きい。

その上で自分が空中をどう動いて装備をどう操作するか、頭の中で思い描かなければならないと。……なんでこうなつちやつたの？

「ぜあああああっ！」

「はあああっ!!」

ともあれ、敵が僕に集中しているのであればその他に意識が向かないわけで。

この隙に一夏が零落白夜を、鈴が青龍刀と衝撃砲を使いそれぞれが狙つた敵に攻撃を仕掛ける。

「逃がさない」

敵が人間離れした反応速度で二人の攻撃をかわそうとしたところに突進、そのまま轟殺する事も視野に入れつつ行く手を遮る。

通常の I S より一回り以上大きなサイズは伊達じやない。加えて全身装甲という特性上、玉兎はその質量だけでも十分な武器となるのだ。

「逃がさないって」

それでもなお逃げようとする敵の内一機を、計五機のハードスケイルから展開した簡易アーム——隠し腕を使って拘束し、その上でバインダーのビーム砲を至近距離から浴びせる。

薄々わかっていた事だけど、貫通した装甲の奥はがらんどうで、操縦者の姿はない。襲撃してきた I S はみんな無人機だつた。

「お前、エグいな……」

「手加減いる?」

「馬鹿言つてないで、いくわよ一夏!」

「なんで俺ばっかり……」

ぼやく一夏だけど、目から鬪志は消えていない。

そうして五月の襲撃事件は、一旦の終息を迎えるのだつた。

月の兎（後）

「……で、いつ連絡するの？」

と、テーブルにコップを置いた鈴が僕の隣に座る。
夜。早めに夕飯を済ませた僕らは、日課の散歩をせずに寮の自室にいた。

お互い気持ちは沈み気味。

まあ、はしゃげるような気分でもないよね……。

今回の襲撃事件は無人機を全て撃破した時点で解決した事になつているけれど、ここにいる僕ら二人の中ではまだ生きているんだから。

話はまだ、終わつていなかつたんだ。

「しなきやダメ？」

と、いうのは嘘と本当半々くらい。実際のところ、僕らはそこまで落ち込んでいない……落ち込んではね。

あの戦闘が終わつて、改めて敵ISが無人機だと確認した僕の頭によぎつたのは、今も世界のどこかにいるであろう姉さんの顔だつた。篠ノ之東博士。世の中的にはそつちの方が馴染み深い呼び方なんだけど、あとにかく姉さんは天才さんだ。

ISを世に出したのは姉さんだし、その心臓部であるコアを作れるのも姉さんただ一人。

だから大人たちは姉さんを血眼で探すし、無理難題を要求する。
で、それが嫌だから姉さんは全力で逃げる。その結果が今の悪循環。世の中終わつてるね。

人が乗らなきや動かないISの無人機なんてものを作れるのは姉さんくらいなものだし、今回の襲撃事件に姉さんがどこかで絡んじやつてるのは火を見るよりも明らかなのだ。

鈴も相手が無人機だとわかつた時点で、これが姉さん絡みだとわかつたみたいだつた……とはいえ。

ぶつちやけもう終わつた事だし、こうして僕らは怪我もせず五体満足で生きてるんだから事件解決つて事でいいんじゃないかなつて、僕

はそう思つてるんだけど、

「ダメ。そうやつて甘やかしすぎると、アンタの悪いとこよ……
ま、そこがいいんだけど。とにかく今回はダメ」

鈴は気にしてないようでいて、とりあえず追及だけはしておけど
言つてくる。なあなあにしておくのが許せないみたいだ。特に、今回
の件に關しては……。

「それに、別に怒らうつてわけじゃないでしょ。話を聞きましようつ
て言つてるだけなんだから……」

「……わかつた」

ええい、うだうだ言つても仕方ない。

嫌な事は早め早めに済ませてしまおう。そしたら、さつさと寝て忘
れると。

携帯電話を取り出して、姉さんがくれた拡張ツールを繋ぐ。これで
世界のどこかにいる姉さんといつでもどこでも通話できるのだ。
……え、電波法？ 姉さんと気軽に連絡できない世の中が悪い。

「モシモシ、姉さん？」

今日は珍しく数コール間があつた後、ぶつり——と相手が電話に出
た。

いつもは掛けた瞬間に姉さんなりクロ工なりが出るんだけど……
うたた寝でもしてたのかな。

「……はい。こんばんはです、お父さん」

「ん、クロ工か。こんばんは。それで、姉さんは？」

「……その、東様は現在、ぽんぽんペいんなので出れません」

「ぽんぽん……何？」

「ぽんぽんペいんです。お布団の中でうんうんと唸つています」

「……大丈夫？」

心配する僕の隣で、鈴が鼻を鳴らす。

「見え透いた仮病ね、まったく……大方雪夫に怒られるのが怖くて出
れないんでしょ」

「仮病つて、見てないのにわかる？」

「腹イタはね、仮病の常套句なの。こんな都合よくお腹だけ痛くなる

わけないじやない。クロエ、アンタも隠してるとタメにならないわよ！

「束様は今、私の隣にいます」

「え、布団の中じやなかつたの？」

途端に向こうが騒がしくなる。

なにやら争つているような音がして、時折『裏切りものー！』や『化けて出てやるー！』といった声も入つてきた。

姉さん……。

「お待たせしました、お父さん」

しばらくして出てきたのは、やつぱりクロエだつた。

「今から束様に代わります」

「ん、よろしく」

「……束様、お父さんから電話です」

「知つてるよう、だからクーちゃんに出てもらつたんじやん！」

ほら、仮病だつたでしょと鈴がドヤ顔を浮かべる。

まあ僕の心配が杞憂で済んでよかつたよ。ご飯食べられなくなるから、腹痛つてただの熱よりつらいんだよね……。

「……姉さん、声もろに入つてる」

「え、ウソ……あつ」

「急にお腹痛くなつたフリして逃げるのはナシだからね、束さん」

すかさず鈴が言うと、『ぎくりつ』と返つてきた。

姉さん……。

「今日、学園に無人機が迷い込んで——」

「殴り込みの間違いでしょ」

「きた。……まあ、それは姉さんも知つてるとと思う

「あうう……」

「单刀直入に訊くけど、あれはなんだつたの？」

「怒らないからちゃんと説明してよね」

鈴、その言い方は怒るやつだよ。

「……本当に怒らない？」

「怒らないよ」

姉さんによると、事の顛末はこうだ。

数年前からとある組織——便宜上、組織とする——からコンタクトがあり、IS技術の提供を要求されたのだという。

それ亡……ファント……げふん。

もちろん提供してやる義理も興味もない姉さんは丁重にお断りしたものとの、組織の人間は手を替え品を替え交渉してきた。

……よく姉さんを何度も探し出せたね。そのド根性だけは称賛するよ。

で、遂には交友関係にまで手を出し、あろう事か一夏を拉致監禁して交渉の材料にしようとしたらしい。

これ、この話は僕も知ってる。千冬さんが世界大会二連覇を逃した事件だ。

一線を越えた報復としてボコボコにするも、それでもなおゴキブリ並にたかつてくるしつこさにストレスが限界に達した姉さんは、遂に面倒臭くなつて組織に技術提供をしてしまつた。

技術提供といつても、完璧なISコアは自分でなきや作れない。結果として誕生したのが、凡人でも作れちゃう最も十全なISコアの劣化コピー品、そのレシピ。凡人でも作れちゃうというのがミソなのだそう。

コアネットワークがなく、武器やP.I.C、ハイパー・センサーにエネルギーを回すと、シールドバリアーや絶対防御といったエネルギーを消費する防御機能が一切使えなくなるという致命的な欠陥を除けば、概ね本家と同程度のパフォーマンスを発揮できるらしい。カタログスペックだけはいつちよ前なのが意地悪なところ。

くれてやるから金輪際自分に関わってくれるなど提供してやつたのがこれまで数年前なので、組織の存在そのものから今の今までつかり忘れていたというのが、姉さんの言い分だ。

「ごめんね、ゆつきー。お姉ちゃん、あの時はこんな事になるとは思つてなくて……」

「……僕はいいよ」

僕はね。だつて、ちょっと楽しかつたし。

徹底的に壊しておいたから、直して再利用なんて事もできないと思う。

でも真っ当な考えをするなら、その劣化コピー品が出回っちゃつてる事は大問題なわけで……。

その辺は軍人さんとか、I-S委員会の人が姉さんの代わりにどうにかしてくれるんじやない。そのためにはコアを無償提供させて好き勝手にI-S使つてるんでしょ。

「百歩譲つて学園に殴り込んでくるとは思わなくとも、悪用されるのは簡単に想像できるでしょ！」

あれ、怒らないんじやなかつたの？

「うええ、怒つた……怒らないって言つたのに！」

「雪夫はね。あたしが怒らないとは言つてないわ」

「ひいいいん……おに！ あくま！ ひんにゅう！」

「あ、今なんて？」

鈴の顔が一瞬で般若のように変化した。

あー、今のはさすがに擁護できないよ、姉さん。

口が滑るにしても、もつと他にあつたでしょに……。

「……雪夫、ちょっと東さんと二人でお話がしたいんだけど

「ん、わかつた」

「え、ちよ、ちよつとゆつきー、置いてかないでっ！ ゆつきー！」

ごめん姉さん、いくら姉さんの頼みでもそれは聞けないや。

鈴に携帯を渡して、部屋を出る。

その辺を歩いて五分くらいしたらまた帰つてこようかな……。



「……行つたみたいね」

「ねえ。東さん、お腹痛いの本当なんだけどな？」

「変な悪巧みするからでしょ……で、どこまでが計画だつたの？」

扉に耳を当て、雪夫が廊下を歩いていくのを確認した鈴音は、元いた椅子に戻るなりそう訊ねた。

理由は、一夏が倒した無人機はシールドバリアーがきつちり発動していたという点と、最初に乱入してきた無人機と後から来た無人機の動きの差。

後続はさておき、最初の無人機は束が送り込んできたもの。それが、鈴音の立てた仮説だった。

「私が送り込んだ無人機を使って、実戦形式でゆつきーと玉兎を馴染ませておこうかなあ……って。これを機にナノマシンも少しずつ活性化させておきたかったし、後はいつくんの成長を促す副次効果も期待してみたり、学園の警備がどれくらい甘いのかも知つておきたかつたし……場合によつてはクーちゃんを潜入させちゃおうかなとか……」

「欲張りすぎ。それで雪夫に怪我でもさせてみなさい、アンタを地の果てまで追い回すわよ」

「私だつて嫌だよ。でも計画のためにはやらなきやだし……うう、ストレスでお腹痛い……吐きそう……」

「片付けるクロエちゃんが可哀想だから、やるならトイレでしなさいよ」

「うあー！ もつと優しくしてよ、甘やかしてよっ！」

「おあいにくさま。あたしがやつたげたい、してあげたいのは雪夫だけなの」

「……知つてる。私だつてゆつきー以外は願い下げだよ……」

疲れきつた様子の束に、鈴音はため息をつく。

共通点を知らない者が見れば意外な組み合わせかもしれないが、雪夫にべつたりな束と鈴音の間に面識がないはずもない。

衝突は小さいものでも片手で数えられないほどしてきたが、結局は棲み分けに成功し、危うくも絶妙なバランスで平和が保たれているのが現状だつた。

もつと言えば、互いに相手の熱量にドン引きしたのである。『え、そこまでするの？』『頭大丈夫？』『正気？』と、まあ特大ブーメランだったが……。

片や赤ちゃんプレイを希望し、片や授乳プレイ希望なのだから仕方

ない。聞いてる方がドン引きするわ。

「私が無人機を送り込んで少しした後に、便乗するようにあれが出てきてね。そういうえばそんな事もあつたなーって。まさか無人機にしてくるなんて、東さんも予想外だつたよ」

「ふうん……じゃ、示し合わせたわけじゃないんだ」

「するわけないじやん。東さんにちよつかい出してくるんじやないぞーって、言つてあるんだから」

まあそれはないだろうと鈴音も考えていた。

「で、どうするつもりなの？」

「んー、勝手に自滅してくれる分にはいつくんたちのいい経験値になつてくれそうだし、ギリギリまで搾つてポイかな？」

「そ、じやああたしも利用させてもらうわ。強くなれるなら大歓迎よ」「スライム叩いても美味しくないよ？」

「すら……？」

凰鈴音、十五歳。家庭用ゲーム機をピコピコとか言つちゃうタイプである。

「どうせ自分が手を汚さなくとも計画が進むやつたー！…………とでも考へてるんでしょ」

「言い方言い方！ まあそうなんだけどね…………」

利害関係にある二人の間で、雪夫には到底聞かせられないぶつちやけトークが飛び交う。

「あ、今週末にね…………」

「つえー、いーな…………」

「あんた外出しないじやない…………」

こうして夜の女子会は、雪夫が帰つてくるまで続くのだった。

野望のゴ褒美

六月に入つて最初の日曜日。

貸切状態のアリーナで、僕はひとり黙々と玉兎の慣らし操縦をしていた。

「…………」

実技の授業で先生が手本に見せてくれた基本的な飛行操縦。上昇と急降下、それから完全停止。

それが終わつたら仮想ターゲットを表示させて、射撃訓練も少しだけやつておく。

シミュレーションだから本物の弾は出ないものの、あたかも本当にビームが迸つているかのようなエフェクトがあるから結構派手だ。

「……つぎ」

本当ならここに誰かしら専用機を持つてる人なり呼んで、訓練に付き合つてもらうのがいいんだろうけど。

一夏は弾の家に行くつて話をこないだ聞いたし、鈴は用事があるつて言つてたから今日はひとり。

それなら量産機でもつて思うんだけど、鈴は相変わらず僕を避けてるみたいだしなあ……。

「ふう……」

最後までしぶとく残つていた標的の撃破判定が下り、姉さん監修のシミュレーションが終了した。

その場で止まると、思つていたよりも自分が疲れていることに気付かされる。

（ちよつと動いただけなのに……）

加減速や制動の負荷からくる肉体的な疲労よりも先に、頭が疲れてくるのが玉兎だ。

初陣は短期決戦で終わつたからよかつたものの、今後もそうとは限らない。強敵が相手だと、長引くかもしれない。

（疲れて動けませんなんて言つてられないもんな）

それにまだ、この機体のポテンシャルも最大限に引き出せてないこ

とだし。こんなもんじやないのだよ玉兎は。

だからこうして慣らし操縦をしていて、少しでも継戦能力をつけておきたいところ。……なんだけど、

(ただ、今日はこゝらで終わりにしとかないと……)

鈴との約束があるので、僕はピットに戻ることにした。

頑張るのもいいけど、疲れたらやめること。無理はしないこと。

その点については僕も賛成だ。無理して倒れちゃ元も子もないし。

(人には人のペースがあるんだ)

ピットゲートを通過後、玉兎を展開解除する。

「おつとど……」

自分を覆っていた膜が消えると、ISの補助がなくなつて足元がすこしふらついた。

特に玉兎は普通のIS——僕が乗つた中だと量産機の打鉄よりも体が浮かんでる感が強いから、乗り降りした後はしばらくふわふわするんだよね。

「雪夫、ちよつと時間ちようだい」

ベンチに腰掛けると、鈴がピットに入つてきた。いつもいいタイミングでくるよなあ……。

で、なんだつけ。僕の時間?

「いいよ」

汗を拭き取りながら答える。ちよつとだけなんて言わずに、いくらでも。

「じゃ、先にお昼ね。着替えたら行きましょ」

「もうそんな時間?」

「知らなかつたの。とつこの昔にいい時間になつてるわよ。まつたく、あたしがいなきやダメなんだから……」

「面白ない」

いつものように鈴に手を引かれて、制服に着替えた僕は、足早にアリーナを後にした。



一方その頃、友人の五反田弾とお昼を済ませた一夏は……。

「一夏お前、すぐに彼女作れ。すぐ！」

「はあ!？」

「はあじやねえ！　すぐ作れ！　今年——いや、今月中に！　お前ならできんだろう！」

弾に迫られていた。……ではなく、彼女を作るようになって説得されいた。文言はかなり無茶苦茶だつたが。

弾の妹、五反田蘭が一夏に惚れており、一夏との関係を深めるために来年、I.S学園を受験すると言い出したためである。兄として複雑な心境があつたのだろう。

「別に、今はそういうのに興味ねえよ」

「相変わらずお前は……枯れた老人かつつーの。そんなどから中学の頃は……」

「……？　なんかあつたつけ？」

「いや、なんでもない。……ていうかだ、誰でもいいから付き合え。な？　な!?」

必死に説得を試みる弾だが、この手の話題を前にした一夏の反応は大概おざなりだ。

「大体お前、そう言つていつ女に興味が湧くんだよ。アレか？　モテスリム気取りか？　ふざけんなよコノヤロウ！」

「なんでキレイなんだよ」

「キレイでねえよ！　バカ！　なんでお前は男に生まれてきやがつたんだ!!」

「理不尽!!？」

説得力皆無だが、実際のところキレイてるというよりは必死極まりないだけという……。

一夏はモテる。異性に、それはもうおモテになる。

弾の脳裏にふと浮かんだもう一人の幼なじみもモテていた方だったが、実質一人を選んでいたというか独占されていたというか。

自分宛のラブレターを本気で一夏宛のものと勘違いして流すよう

な天然だつたし、告白されたできつちり理解してその場で即オコトワリを入れるような男だったので、実害は少ない方だつた。

ただ一夏は酷い。この男は素で思わせ振りな態度をとつたりするものだから、女子の惚れた腫れたが長引くのだ。

それで女子に興味ないとか言うもんだから、弾たちモテたい男子からしてみれば、お前ふざけんなよなマジといった具合なのである。

「文化祭の天使事件『女装一夏（千冬似）』がことのほか似合つており、事情を知らない客が物の見事にメロメロにされた事件を指す。」を知つてる者からすれば、こいつがマジで男じやなけりやよかつたのに、と血涙を流す勢いだつた。

「お兄」

と、妹の蘭が一夏たちの前に戻つてきた。途端に弾の体が震え出す。

「お、おおおお、おう。なななんんだ？」

弾の尋常ではない様子に、気になつた一夏も蘭を見る。見てしまつた……。

『余計ナコトヲスルナ』

目は口ほどに物を言う。正にそう兄を脅す蘭の瞳の奥には、凄まじい力が秘められていた。

某海賊漫画の特殊技能かな。思わず一夏も、なんだこのプレッシャーは!? と、声を出しそうになつたがこれを堪える。

「で、では私はこれで」

「……おつと、せつかくのご飯が冷めるといかん」
蘭が立ち去り、食事を再開する一夏。

「…………」

弾は物言わぬ彫像になつた。

「…………んで……えが……」

「うん?」

「なんでお前ばっかりモテるんだ!? ええい、この顔か!? この顔がモテスリムか!? スリム分はやるからモテ分を寄越せ!」

かと思えば、一夏の首を絞めてやると言わんばかりに身を乗り出す

弾。

「うるせえぞ弾！」

厨房から弾の祖父、五反田巖の一喝が飛んでくる。これ以上騒ぐと言葉ではなく、物理的に中華鍋が飛んでくるだろう。

これには堪らず弾もはいっすみませんでしたつと、お行儀よく椅子に座る。

「くう……冗談はさておき、マジでどうなんだ。ファースト幼なじみ……？ 部屋も前まで一緒だつたんだろ、いいな、とか思つたりしないのか？」

「……そんな暇なかつたな。あいつ氣難しいんだよ。出てく時もいきなり怒り出すし……」

「お前……。同じ幼なじみでも雪夫と鈴のやつはあんななのに、どうしてお前たちはそんな違うんだ……？」

「いや、どうしてつて言われてもな……」



「——ヘプツ」

「大丈夫？ 体冷えちゃつたのかしら——ツクチュン！」

「……誰かが僕らの噂してるのかもね」

お昼すぎ。僕らは食堂で昼食を済ませて、席が空いてるからちよつとのんびりさせてもらつていてる。

「じゃ、デザートにしましようか」

「……デザート？」

「はい、これ

「わ、なんだろ」

テーブルに置いた手提げから、タッパーを取り出す鈴。

「結局、クラス対抗戦はあのままやむやになつちやつたでしょ？」

「そうだね」

六月の行事が迫る中、五月の対抗戦は無期限中止になつたままだ。ちなみに、襲撃事件のことはあれからすぐに学園から箇口令が敷か

れている。直接戦闘に関わった僕らは誓約書まで書かされた。

「中止になつて、優勝賞品の話もなくなつたわ」

「うん」

「優勝して、アンタにデザートのフリー・パスをプレゼントするつもりだつたんだけど……」

「そうだつたの？」

「そうだつたの。だから、これ」

鈴がタッパーの蓋を開ける。

「あ、ゴマタマだ。好きなやつ」

「ふふ。……知つてる」

目を細めて笑う鈴に、自分でも目を輝かせているのがわかる。

中身は、鈴の手作り胡麻団子だつた。

「食堂デザートみたいに華やかじゃないけど、対抗戦で頑張つたゞ」褒

美ね」

「頑張つたのは鈴じやないの？」

一夏との試合もその後も、一番頑張つてたのは鈴だ。

「……その顔がご褒美なの」

「……？」

言葉通り、にこにこと笑う鈴。

意味はわからなかつたけど、鈴の胡麻団子は食堂のデザートより美味しかつた。

幼なじみと噂話

時刻は六時を回つて夕飯時。

休日の午後をのんびり過ごした僕らは、食堂に行く前に一夏の部屋を訪れていた。暇してるなら一緒に食べようつて誘うつもりだ。

卷之二

一
おう

鉛がノックするのと同時に、ドアを開けて一夏が顔を出した。

金華山の雪景

「あんたが部屋で一人寂しくしてるだろうと思つて、こうして誘いに

そうそう。
らね

「そりやどうも。じゃあ食堂に行こうぜ」

一
老
者
ほ
ら
雲
夫
行
く
れ
よ

一
わ
か
ー
た

一夏を後列に 錦と並んで歩き出す 翠の廊下を進んでいると
じようこ食堂こに行こうとしている寮生 うすれ違う。

[...]

夏?

一あ？いやなんでもない……

「おつ。織斑くんだ。やつほー」

「ええ！ お繩球くふ！」

廊下に立っていた女の子が、こっちを見て手を振る。あれは一夏のクラスにいる子だね。僕も名前までは知らないけど、いつも寮で見かける時はブカブカのパジャマを着ていて、のんびりとした子だからよくなれてる。

「やー、おりむー」

「その愛称は決定なのか？」

「決定なのだよー。それよりさあ、私とかなりんと一緒に夕飯しようよー」

とててつと一夏に近寄り、じやれつくようにひつつくパジャマさん。むむ……。これは、筈に新たなライバルの登場なのか……？

「残念、一夏はあたしたちと夕飯するの」

「わー、りんりんだあ。勇気が出そうだねー」

「その呼び方はやめてちょうだい」

過去に苦い思い出のある鈴がぴしやりと言う。

けどこの様子だと、パジャマさんはきつとまたそう呼ぶんじやないかな。悪気がないだけに、どうして鈴が嫌がるのかもわかつていなさう。

ちなみに小学生時代、鈴はクラスの男子から名前をからかいのネタにされてたんだ。

あの頃の流行りだつたのと、鈴が中国人だつたのも手伝つて、『リンリンつてパンダの名前だよなー。ほら笹食えよ』……みたいな。音が同じだからってヒドイよね。あれは雄パンダの名前なんだよ、鈴は女の子なのに。

……つて、論破したら僕も茶化されるようになつた。君らよりは好きだよつて返したら黙つちやつたけど。

「ゆつきいも、こんばんはー」

「こんばんは」

「ちょっと、話終わつてないんだけど？」

「ま、まあ鈴。落ち着けつて。別に、五人で食べてもいいだろ？」

「よくないつ……けど。いいわよ……」

ぶすつとした顔で了承する鈴。可愛い。

まあ幼なじみ再集結祝いは、やろうと思えばいつでもできるものね。ここは一夏のお友達付き合い優先で。鈴もたぶん、僕と同じ考えなんじやないかな。

「ところで、そのかなりんつて子はどこかに行つちやつたぞ？」

「おわー。ほんとだーいないー」

そそくさと廊下の先へ消えてくかなりんさん（仮）。

「あー……待つて！」

そしてそれを追いかけるパジャマさん。見るとちよつと心配になつてくる……。

「行つちやつた」

「行つちやつたわね」

「行つちやつたな」

「……不思議な子だつた」

「そうね。さ、あたしたちも行きましょ」

「そうだな。行くか」

気持ち早足で食堂に向かう僕ら。

パジャマさんたちと夕飯するのはまた今度つてことで。



「ねえ聞いた？」

「聞いた聞いた！」

「え、何の話？」

「だ、か、ら。あの織斑くんの話よ」

「いい話なの？ それとも、悪い話？」

「最上級にいい話」

「え、聞く聞く！」

「まあまあ落ち着きなさい。いい？ 絶対これは女子にしか教えちゃダメよ？ 女の子だけの話なんだから。実はね、今月の学年別トーナメントで——」

女の子は噂好き。まあ男子でもゴシップ好きはいるだろうけど、でもやっぱり女の子の方がいつでもどこでも噂話に耳を寄せ合つてゐるイメージ。

学食はそんな女の子たちの情報共有の場として活用されていたり、されていなかつたりでいつも賑やかなんだけど。なんか、今日は奥の方で露骨な集会がはじまつてゐるなあ……。

「ん？ なんだあそこのテーブル。えらい人だかりだな」

「トランプでもやつてんじゃないの。それか、占いとかさ……」

集まりに気付いた一夏に、鈴はなんとなしに答える。

「えええっ!? そ、それ、マジで!?

「マジで!」

「うつそー！ きやー、どうしよう！」

きやいきやいと女の子っぽい騒がしさが食卓を彩る。

ところで僕、結構耳がいい方なんだ。だから会話がそこそこ聞こえちゃってるんだけど……。

え、一夏がまたなんかやつちやつたの。あの中の誰かが織斑くんがどうとか言つてたよね、今。

そんなに盛り上がりがれるほどになにかが、今月の学年別トーナメントと一夏にあるのかな。

「一夏」

「おう」

「なにか年寄り臭いこと考えてんでしょ」

鈴の指摘を聞いて、僕も一夏を見る。

夕飯の煮物をつつきながら、細い目をしていた。遠い目つてやつ。「失礼な」

「いや、絶対そうね。なんか一夏つてそういうこと考えてるとき目細めてるじゃない。なにあれ？ 思い馳せちやつてるの？」

薄く微笑み、鈴は元から切つてある鶏の焼いたのを、さらに小さく切り分ける。

「う、うるさいな……」

「あんたにボーッとされてちや困るわよ。あたしが不在の時には、雪夫を見ててもらわなきやなんだから」

「鈴、どつか行くの」

「もしもの時よ、もしもの。それに、男の子は男の子といった方が気持ちも楽でしょ。頼むからね、男子生徒！」

「おう」

幼なじみ再集結祝いらしい会話もそそここに、楽しい時間はあつと

いう間に過ぎてゆく。

夕飯がお腹の中にはすっかり収まつたところで、鈴が席を立つた。

「お茶取つてくる。番茶でいいわね？」

「サンキュー。手伝おうか？」

「ありがと。でもいいわ、自分のついでだし。雪夫見ててちょうどいい」

「おう、任せろ」

「おかしくない？」

え、そこからお茶取つてくるだけだよね。鈴の不在判定なのこれ。もしかしてお茶つ葉摘んでくるの？……なわけないか。

小柄だけど頼もしい後ろ姿を見送りながら、僕は軽く首を傾げた。

「あー——つ！ 織斑くんだ！」

「えつ！ うそ、どこ!?」

「ねえねえ、あの噂つて本当——もがつ！」

一夏に気付いた女の子たち数人が、押し寄せてくる。

勢いのままにか訊こうとした子はすぐ別の子に取り押さえられただけど、一夏のアンテナにはばつちり引っかかつたみたいだ。

「なんだ？」

「い、いや、なんでもないの。なんでもないのよ。あははは……」

ひとりが大の字で後ろの子を隠してゐる陰で、二人が小声で話をする。

「——ばか！ 秘密だつて言つたでしようが！」

「えー、でも本人だし……」

聞き耳を立ててるつもりじやないけど、そんな会話が聞こえてきた。

でもまあ、難聴さんな一夏にはばつちり効果があるから大丈夫。本人の前でひそひそ話するのはどうかと思うけどな……。余計気に入るよ。

「噂つて？」

「う、うん！ なんのことかな!?」

「ひ、人の噂も三百六十五日つて言うよね！」

「な、なに言つてるのよミヨは！ 四十九日だつてば！」

一年だし追善供養だし……。

翻弄しようとしてるのか本気なのか、さっぱりだけど。一夏は誤魔化されてないみたい。

「なんか、隠してないか？」

「そんなことつ

「あるわけつ

「ないよ!?

そう言つて撤退した女の子たちと入れ替わりで、鈴がお盆を持って戻ってきた。

「なーに？ またなんかやらかしたの？」

テーブルに湯のみを置きながら、鈴が生ぬるい顔をする。

「なんで俺が問題兎扱いなんだよ」

「ふーん、問題兎扱いやないつもりなんだ？」

「…………」

遠い目をしてお茶を啜る一夏。

「ああ、お茶がうまい」

「逃げたわね」

「…………一夏らしい」

「仕方ないんだから……」

ため息をついた鈴は、僕の前に置いていた湯のみを取り、

「ふーふー……はい、ヤケドに気をつけて」

「ありがとう」

「まだ熱かつたら言いなさいね」

「わかった」

と、僕らをじろじろ見ていた一夏が口を開く。

「そういうえば——」

なにかと思ったら、今日弾のところに遊びに行つた話だつた。鈴もそうだけど、入学してから弾たちには会つてないから、懐かしい気持ちになれた。

向こうも相変わらず元気にやつてるみたいだけど、弾の妹がI S学園の受験をするという話にはちよつとびつくりだ。

「ああ、あの子ＩＳ学園に入学するつもりなの」

「そぞらしいな」

「へえ、あの妹ちゃんが……」

あの子、一夏のことキラキラした目で見てたもんな。

妹ちゃんの話を聞いても、鈴は意外そうな顔はしなかつた。よく相談に乗つてあげてたからかもしれない。

「で、入学した時は俺が面倒見ることになつたんだよ」

「ふーん……できるの？」

「……反面教師がいるからな」

擬音とか、感覚で説明したりはしないし、小難しくだらだらやつたりもしないと一夏。この場にいなくてよかつたね。言われても仕方ないけど、殴られてるよ。

「あんたさ、そうやって色んな女の子と軽々しく約束するの、よくないわよ。あんたにその気がなくとも、期待しちゃうものなんだから……」

「期待つて？」

「……頼むから痴情のもつれで刺されたりしないでちようだいね。あんたには友人代表の枠を埋めてもらうつもりなんだから……」「だからそれどういう——あ」

「あ」

「あつてなによ、あつて……。——あ」

「……筈」

皆して動きが固まる。

「……」

我が自慢の、自慢の？ 自慢できるほど仲良くない……。いや自慢の従妹、筈が僕らのテーブルを横切ろうとしていた。

「よ、よお、筈」

「な、なんだ一夏か……」

「……」

あ、なんかあつたねこれ。また喧嘩したのかな。一夏もそただけ

ど、筈は気難しい頑固さんだからなあ……。

「なに、あんたたちなんかあつたわけ?」

「いや、別になにも!」

「こういうところは息ぴったりなんだけど……。仕方ない、ここは従兄である僕がひと肌脱ぎましようぞ。」

「鈴、行こう」

「雪夫?」

「筈、いっちーの隣が空いてますよ?」

「お、押すな!」

「ほら一夏も、もつびーと仲良くデイナらなきやゆつきーが目潰しをお見舞しちゃうぞ?」

「おい雪夫待てって!」

「待てませーん、あとはお若い二人で『ゆつくりどーさらだばツ!』

いつもとは逆の形で、僕が鈴の手を引いて食堂をあとにする。

「雪夫つてやっぱり束さんの弟ね……そこんとこ疑いようがないわ」

「ふう……まあね」

月曜日の朝

「あ、宮田くん、凰さんおはよう！」

「おはよう」

「おはよう」

月曜日。休み明けだけど、二組の教室は朝から賑やかだ。憂鬱そうな生徒はいない。

特に今朝は、学園から配布されたカタログを手に談笑する女の子たちの姿をそこかしこでよく見かける。ISスーツの申し込み開始は今日からだつけ……。

「うーん、どれにしようかなあ」

「沢山あって迷っちゃうよね」

「あれもこれも可愛いくて目移りしちゃう……」

「そうそう！ あつ、ねえ、これとかよくない？」

「え、どれどれ？」

「んー、それちょっと高くない？」

ひとつ口にISのパイロットスーツと言つても、ISスーツはデザインひとつ取つても多種多様で、みんなどれを購入しようか迷つてゐたいだ。

元から学園指定のISスーツもあるんだけど、やっぱり自分が選んだ好きなスーツを使いたいのが女の子の心理なんだと思う。……はい、鈴の受け売りです。

「雪夫のスーツって、やっぱ東さんが用意したの？」

「うん」

姉さんの話によると、普通のISスーツじゃんまり意味がないらしい。これがどういうことかというと、両者のスーツには役割に明確な違いがあるんだ。

従来のISスーツは肌表面の微弱な電位差を検知し操縦者の動きをダイレクトに各部位へと伝達、そのままISの動きに反映されるという仕組みなんだけど僕らじゃそうはいかない。なんてつたつて、普通じやないから。

対する僕のスーツには特定のナノマシンの働きを補助増幅させる役割があつて、これが結果的に僕や玉兎の性能向上に繋がるらしい。取説が付いてなかつたから詳しいことはわからないけど。

要するに姉さんが特別に用意してくれた世界でたつたひとつのISスーツつてこと。それも、玉兎専用の。逆に僕のスーツを着てISに乗ると性能がガツクンと落ちるんだって。

「スーツも僕専用」

「ふうん……着にくいんじゃないの、あれ」

「ん、解決済み」

「あら、可愛いドヤ顔ね」

「…………」

「ふふ、ごめんごめん」

本格的なパイロットスーツのデザインを踏襲した僕のISスーツは、ひとりで一から着ようとすると鈴の言う通りとても着づらい。

パーソナライズ済みの専用機持ちなら、展開装着時に私服o.r制服からISスーツにフォームチェンジできるんだけど、それだとエネルギーを消耗してしまう。

そんなわけでちよっぴり困つてたところを、姉さんがブレスレットの機能を拡張して、変身ヒーロー顔負けの早着替えを実現してくれたんだ。これで問題解決。

「でも、まあそれなら安心だわ。もしあれなら着替えるの手伝おうかとも考えてたんだけど、必要なさそうね」

「困つてたら言う」

「約束よ?」

「うん、約束」

小指を絡めて約束はするけど……。

できることなら、同じ歳の女の子に着替えを手伝つてもらうなんてことにはならないでほしいかなあ。

「スーツといえば」

鈴がポンッと手を叩く。

「午前は一組と合同授業だから、更衣室に行く時は一夏と一緒に行き

なさいね

「わかつた」

「寄り道しないこと、ちゃんと一夏についてくこと。困つたら一夏を頼るのよ?」

「うん……心配ありがと」

今日のIS基礎は一組と二組の合同で、指導するのは一組の担任と副担の先生。つまり千冬さんたちだ。

六月末の学校行事、学年別トーナメントは全生徒強制参加の一大行事。代表候補生や専用機持ちも一般生徒と同じように参加つてのはどうかと思うけど。

で、これに向けて授業はいよいよ訓練機を使つた本格的な実戦訓練になつていぐらし。今年は専用機持ちが多いから、結構激しめな授業になるかもというのがうちの先生の予想。

ついでに先週末のホームルーム中、絶対にISスーツを忘れないようについて言つてた。もし忘れたら水着か下着で参加させられるぞつて。担当が千冬さんなら有り得るかもしれない。

「先生、遅いわね」

「そうだね」

言われてみればたしかに遅い気がする。

「けど、もう来る頃じゃないかな……ほら」

話してゐるそばから教室のドアが開いて、先生が入つてきた。

「みなさん、おはようございます……」

そう挨拶する先生はどこか、元気がない。なにかあつたのかな。

「先生、疲れてる?」
「そうみたいね。なにがあつたのかは知らないけど、嫌な予感がするわ……」

「嫌な予感?」

「ええ、とびつきりのね……」

嫌な予感なんて当たらなきやいいんだけど。鈴が言うところの女の勘つて、よく当たるんだよね。

「はい、ちょっと静かに。先生疲れてますから……」ほん。お隣のク

ラスに転校生が入つてきました

「え？」

「……それも、二人です」

「「えええええつ!?」」

ホームルームが始まるなり、先生の話に一同騒然。転校生、それも二人。おまけにその話を誰も知らなかつたのだというのだから、みんなが驚くのも無理はないか。

鈴が来た時だつて、転校生が来るらしいよくらいの話はあつたんだから、今回の情報統制は先生たちの苦労がうかがえる。

（でも逆に、学園がそれだけ気を遣うつてどんな転校生なんだろう……）

そんなことを考えていたら、先生がパンパンと手を叩いた。

「はい 静かに、静かに。気が重いなこりや……。ええつと、それでですね、二人の転校生の内、ひとりはその――」

きやああああああ――ツ！

耳を塞ぎたくなるような黄色い悲鳴が突然、隣の教室から聞こえてくる。ハウリング発生してない？

「……男の子として。三人目ですね、はい」

転校生のひとりは男子生徒。酷く気が乗らない様子で、先生がそう発表する。言つたら最後どうなるかを考えたらそうなるよね……。

転校生くんか。ひよつとしたら今頃、一夏はもう友達になつてるかもしれない。そんなふうに考えながら、僕は窓の外に意識を向けた。直後、うちのクラスで二度目の騒音災害が発生したのは言うまでもない。

「嫌な予感？」

「長い目で見れば吉兆だったのかしらね……男子か」



先生がホームルームを早めに終わらせてくれて、鈴と別れた後に階段の踊り場で待つていると、程なくして一夏と噂の転校生くんが駆け

足でやつてきた。

「一夏

「——雪夫か！ 今日は第二アリーナ更衣室だ、急ぐぞ！」

「うん」

一夏は鈴と違つて、僕の腕を掴む。大きな手でがつしりと。そして、ぐいぐい力強く引っ張つてくれる感じだ。

別に引っ張つてもらわなくとも駆け足くらいできるし歩けるんだけど、幼なじみ組のどちらかと出かける時にはこうするのが、いつの間にかお約束になっていたんだ。……受験の時もね。

「雪夫……じゃあ君が宮田くん？」

「初めまして——」

挨拶もそこそこに。転校生くんの手をとり、僕も一夏と足並みを揃えて走る。自分から人と手を繋ぐなんて初めてだ。

我ら男子生徒にのんびりしている時間も、お喋りして時間もない。残念ながら。それがなぜかというと、

「ああっ！ 転校生いた！」

「しかも織斑くんも一緒！」

「やつぱり！ 宮田くんのいるここに男子生徒あり！」

二階から女の子たちが駆け下りてくる。中には同じクラスの子もいるし、上級生もいるような……。

あの子たちがどういう集団なのかというと、一年一組に入ってきた転校生くんの姿を一目でいいから見てみたい、あわよくば質問したい、というかする！ といつた気概を持つ女の子たちだ。

捕まつたが最後、遠慮のネジが数本飛んだゴシップ女子の質問攻めに打ちのめされ僕らは授業に遅刻、待ち構える千冬さんに恐ろしい目に遭わされる……らしい。

ちーちゃんは鬼なんだよお！ b y 姉さん

鬼教官の特別カリキュラムが待つていて！ b y 一夏

……なにしたの、千冬さん。

「いたつ！ こつちよ！」

「者ども出会い出会い！」

続々と出てくる女の子たち。

「……ごめん、抜かつた。一生の不覚」

「待て、いつからここは武家屋敷になつたんだ？」

まさか追つかれることに気づけなかつたとは……。

「織斑くんの黒髪、宮田くんの白髪はくはつときて、今度はナチュラルな金髪！」

「しかも瞳はアメジスト！」

「きやああつ！ 見て見て！ 手！ 手繫いでる！」

「違うわ、織斑くんは宮田くんの腕を掴んでるのよ！」

「突然現れた転校生の略奪愛！ 略奪愛なのね！」

「それに対しても織斑くんが『俺以外のやつと仲良くするなよ……』

きやー！」

「日本に生まれてよかつた！ ありがとうお母さん！ 今年の母の日は河原の花以外のをあげるね！」

なんか今、変な人いなかつた？ それもいっぱい……。

「な、なに？ なんでみんな騒いでるの？」

珍しい重みを感じてると、転校生くんがキヨトン顔でそう訊いてきた。

「そりや男子が俺たちだけだからだろ」

「転校生」

「ああ、そうだな。転校生もいるしな」

「……？」

あれ、わかんないかな？

転校生の反応に一夏も変だと思つたのか、

「いや、普通に珍しいだろ。ISを操縦できる男つて、今のところ俺たちしかいないんだろう？」

「あっ！ ——ああ、うん、そうだね」

「それとあれだ。この学園の女子つて男子と極端に接触が少ないから、ウーパールーパー状態なんだよ」

「ウー……なに？」

「メキシコ原産のサンショウウオ」

「そう、それ。昔日本で流行った珍獣なんだと」

「へ、へえ……」

うちも飼つてるよ、今ので三代目。お亡くなりになる度に悲しむのに、だつて可愛いじやないって母さんは懲りずにまた飼うんだ。

「しかしあまあ助かつたよ」

「なにが？」

「いや、やっぱ男一人はきついからな。ほら、学園に二人いるつていつも、雪夫とは別々のクラスだし。仲間がいるつてのは心強いもんだ」

「そうなの？」

「……そう？」

「いや、なんで雪夫まで首傾げるんだよ……」

うーん、僕は鈴がいるから気にならないのかも。筈も素直になればいいのに……あ、そういうえば昨日はあの後どうなつたんだろ。お昼休みにでも訊こつと。

「ま、なんにしてもこれからよろしくな。俺は織斑一夏。一夏つて呼んでくれ」

「雪夫でいい」

「うん。よろしく一夏、雪夫。僕のこともシャルルでいいよ」

「わかった、シャルル」

そんな話をしてるうちに校舎を出た僕らは、真っ直ぐ第二アリーナを目指した。

「よーし、到着だ！」

一夏がタッチパネルを操作し、未来的なドアを開けて中へと駆け込む。その先にあるロッカーの並んだ部屋は第二アリーナ更衣室。
……僕はロッカー使わないけど。

「うわ！ 時間やばいぞ、すぐに着替えちまおうぜ」

時計を見るなり、一夏が制服のボタンを勢いよく外しはじめる。脱いだ上着をベンチに放り投げ、下のTシャツも一息に脱ぎ捨てて上半身をあらわにした。

「わあ!?」

「……わ」

「？」

そんな様子をやつぱり男らしいなあと見ている僕の横で、転校生くんが可愛らしい悲鳴をあげる。

「荷物でも忘れたのか……って、なんで着替えてないんだ？　早く着替えないと遅れるぞ。シャルルは知らないかもしねないが、うちの担任はそりやあ時間にうるさい人で——」

「う、うんっ？　き、着替えるよ？　でも、あっち向いてて……ね？」
「??　いやまあ、別に人の着替えをジロジロ見る気はないが……あ、シャルルはジロジロ見てるな」

「み、見てない！　別に見てないよ！　ほら、雪夫も！」

「わかった」

そんなやり取りをする二人だけど、時間は刻一刻と進んでいる。
「まあ、本当に急げよ。初日から遅刻とかシャレにならない——とい
うか、あの人はシャレしてくれんぞ」

「そうかな」

「あー、お前は東さん杵だからな……参考にならんかもしねん
ん、そつか」

姉さん杵？　そんな褒められ方したの初めてかもしねない。

「…………」

二人に背を向けて、僕の中で壁の時計とのにらめっこ開始のゴング
が鳴つてから少し。

「シャルル？」

「な、なにかな？」

慌ててジッパーを上げる音がした。

「うわ、着替えるの超早いな。なんかコツでもあんのか？」

「い、いや、別に……つて一夏まだ着てないの？　あ、あれ？　ゆ、雪
夫は制服もまだ脱いでないし……体調悪い？　もしかして、具合悪い
のに僕を引っ張ってくれたの？　ご、ごめんね……？　大丈夫？」
「平気」

強いて言うなら一夏がスーツを着るのに手間取つてゐる、見てて面

白いなつて。今は下が腰を通したところで止まっちゃつてるところ。

「ああ、雪夫はちょっと特殊なんだ。俺の場合は……つとど。ふう……。これ、着る時に裸つてのがなんだか着づらいんだよなあ。……引つかかって」

「ひ、引つかかって？」

「おう」

「…………」

あーあ、顔が真っ赤。シャルルはそつちのネタが苦手なのか。またしかに、それで盛り上がりつつちやうのも褒められたものじやないけど。

「——よし、行こうぜ」

「う、うん」

「わかつた」

「ふえ？ ……雪夫、いつ着替えたの？」

「ん、今」

ブレスレットの表面をタツチして、即変身。なんと所要時間は僅か0.03秒なのだ。気分とお好みでポーズと掛け声もどうぞ……今日はバスで。

全員が着替え終わつたところで更衣室を出て、揃つてグランドに向かう。

「そのスース、なんか着やすそうだな。どこのやつ？」

ふと、シャルルを見た一夏が会話をふる。一夏から僕のは参考にならないみたいな思念が飛んできてるんだけど……？ そりやそうか。「あ、うん。デュノア社製のオリジナルだよ。ベースはファランクスだけど、ほんとフルオーダー品」

「デュノア？ デュノアってどこかで聞いたような……」

「え、そうなの？ 僕知らない……。

「うん。僕の家だよ。父がね、社長をしてるんだ。一応フランスで一番大きいＩＳ関係の企業だと思う」

「へえ！ ジゃあシャルルつて社長の息子なのか。道理でなあ」

「うん？ 道理でつて？」

「いや、なんつうか気品つていうか、いいところの育ち！　つて感じがするじやん。納得したわ」

「いいところ……ね」

「僕のは姉さんのお手製」

「雪夫、そこ張り合うところじゃないと思うぞ……？」

あれ、違うの。

「……じゃあ、雪夫が篠ノ之博士の親戚つて話は本当なんだ」

「ん、自慢の姉」

「正確には従姉妹だろ」

「血の繋がりつて大事？」

「……ま、当人たち次第だわな」

大事なのは他人同士ではないということ。だから姉さんが姉である必要はないし、僕が弟である必要はないんだ。

実際、僕が姉さんつて呼びたいからそう呼んでるだけだし、それを姉さんが嫌つて言うなら別の呼び方に変えたつていい。

入学当初もそうだけど、みんなして僕と姉さんが親戚なのか気にするるのは、やつぱりちょっと滑稽だよね。

宮田くんつて篠ノ之博士の血縁者なの？……みたいな。血の繋がりがなきやダメなのかなつてさ。

「……一夏もすぐいよ。あの織斑千冬さんの弟だなんて」

「ハハハ、こやつめ！」

「へ？」

「——いや、なんでもない。まああれだ、皆して地雷を踏みあつて一機ずつ減つたつてことで」

「……?? よくわからないけど……」

一夏は一夏でつらい事情があるつてこと。

僕は背中を押して支えたい派だけど、一夏は前に出て守りたい派だからね。乗り越えるべき背中が大きすぎると苦労するんじやないかな。

「一夏、千冬さんこっち見てる」

「げつ、マジ？　よく見えたな……」

「……急ぎ」

「お、おう。シャルルも行こうぜ」

「う、うん……」

話もそこそこに、僕らは駆け足で第一グラウンドに向かうのだった。

月曜日の午前

「遅い！」

第二グラウンドに到着した僕らを出迎えたのは、腕組みをした千冬さんだった。

「うへえ……」

「一夏すぐく間の抜けた顔してる。おかしなこと考えてる時のあれだ。

「くだらんことを考えてる暇があつたらとつとと列に並べ！」

「いてつ！」

ふわ、一夏叩かれたつ。ひえー……。

僕は二人と別れて、一組の後ろに並んだ二組の列に加わる。ええと、鈴はどこだろ。合流しどきたいな。

「ここよ、ここ」

「……？」

あれ、鈴の声だ。後ろかな？

「千冬さんじやないけど、遅かつたわね」

「……鈴」

おお、もつと後ろだつたか。うつかりうつかり……。

ううん。僕の気の所為かもだけど、ISスーツ着ると距離感がちよつぴり狂うんだよね。ハイパーセンサーがぽわぽわしててみたいいな感じ。なんか変。

少し動いて横に並ぶ。と、鈴は眉を下げて僕を見た。

「なにがあつたの？」

「シャルルの案内してた」

「シャルル？　ああ、そつか転校生……」

そのまま首をこてんと曲げる。

「仲良くできそう？」

「わかんない」

まだそんなに話したわけでもないし。でも、いい人だとは思うよ。悪い人じやないんじやないかな……多分。

「ふうん。どんな子なの?」

「……面白い」

「そつか……やば、千冬さんが来るわ。静かにしどきましょ」

「うん」

ずんずんと歩く千冬さんの動向をじつと見守る。

「では、本日から格闘及び射撃を含む実戦訓練を開始する」

「はい!」

一組と二組の合同実習が始まつた。千冬さんが先生だと空気がピリツとするなあ……。

でも変だ、一組の副担さんがどこにもいない。合同実習は千冬さんと副担さんの二人で指導するつて、うちの先生から聞いてたんだけど。

「近くに起動済みの訓練機がいるわね」

「鈴、部分展開してる?」

「センサーだけ、もう解除したわ。……つたく、なに企んでるのかしら」

腕を組んでぶすつとする鈴。稼働中の訓練機は、姿の見えない副担さんかな。多分鈴も気付いてるはず。

「今日は戦闘を実演してもらおう。ちょうどやる気に満ちた専用機持ちもいることだしな。——凰! オルコット!」

「……へえ」

「わたくしですか!?

獰猛な笑みを浮かべるオコジョ——鈴に対し、同じように千冬さんから名前を呼ばれたオルコットさんは不満そう。僕が交代してもいいけど、千冬さんは曲げないだろうな……。ちえ。

「専用機持ちはすぐにはじめられるからだ」

「だからってどうしてわたくしが……」

「織斑は汎用性がないし、宮田は特殊すぎて参考にならん。わかつたな、わかつたら前に出ろ」

真つ当な理屈を述べる千冬さんだけど、それでもオルコットさんは首を縊にふらない。ごめんね、参考にならなくて。

「それって消去法ってことじゃ……」

「さつさとはじめるわよ」

「ちよ、ちよつと鈴さん!？」

「なによ。……セシリリアは一夏にいいところ見せるチャンスでしょ?」

鈴がオルコットさんになにやら耳打ちをする。

ちらちらと一夏の方を見てるから、多分一夏をダシにしてオルコットさんを焚き付けてるんだろうけど。

「やはりここはイギリス代表候補生、セシリリア・オルコットの出番ですわね！」

恋する女の子つてすごい……。

「……単純で助かるわ」

「あら、なにか?」

「いーえ、別になんでも。まあ、あたしも似たようなもんよね……」

いきなりやる気を出したオルコットさんの姿に、一夏は首を傾げている。僕は鈴が生暖かい目をしてる方が気になるかな。どうしたんだろ。

「それで、相手はどちらに? わたくしは鈴さんとの勝負でも構いませんが」

「そうね。相手がなんでも、誰でも、あたしは勝つだけよ」

「……慌てるなバカども。対戦相手は——」

キイイイイイ——……

「……?」

千冬さんの次の言葉を遮るように。どこからか、ここ最近よく耳にするような音が聞こえる。

これはI Sが滑空してる音だ。こつちに近づいてきてるみたいだな。

「雪夫!」

返事をする間もなかつた。鈴の声が聞こえた瞬間、突風が吹いたかと思うと、体がぐんつと空中にさらわれる。

それとなにかが地面に激しく衝突したような、派手な音が下の方から聞こえてきたのはほとんど同時だつた。

ちなみに突風の正体は鈴。僕は宙に浮かぶ甲龍に抱っこされた。これは知つてゐる。姫抱きつてやつだ。

「鈴？」

「危ないわね……雪夫、大丈夫？」

「平氣」

これくらいならまだちよつとしたジエットコースターみたいなのだ。一度も乗つたことないけど、絶叫マシン……。こんな感じのかな。

「そ、よかつた。……ルート上にいた一夏には悪いけど、万が一を優先させてもらつたわ」

「なにがあつたの」

「ちょっとね、訓練機が墜落したの」

「墜落？」

「大したことないのよ、大したことは。ただ、ちょっと……うわあ……」

そんなふうに話されると、地上でなにがあつたのか気になつてしまふもの。僕の知識欲と好奇心は姉さんでも止められない。そんなわけである……。

少しでもいいから下を見ようと、軽く体をよじる。

「あ、ダメ！」

「むぎゅ……」

すると、鈴が僕の頭を抱き込むような形に姿勢を変えた。なんといふ不覚……。物理的にとめられてしまった。

「雪夫は見ちゃダメ。……目が腐るわ」

「腐るの？」

なにそれ怖い。鈴とか、他の人は見ちゃつて大丈夫なの？

「腐るわね、確実に。どうしても見たいなら束さんのでも見ときなさい」

「……？」

「つとに、あいつどうなつてんのよ。あーあ、心配して損した気分……」

「どうこと？」

「……ごめん、あたしがどうかしたわ。今のは忘れて」「うん、忘れる」

「ごめん。いやほんと……ごめんなさい」

鈴がどうして謝るのか意味がわからない。

けれど、ここ数分で鈴の表情がどつと疲れたものに変わっているのはわかる。授業が終わったら、お昼休みに労つてあげないとな。

「凰、さつさと降りてこい」

千冬さんに急かされ、鈴は渋々地上に降下した。



「ごほん……。というわけで、三人には模擬戦をやつてもらう。——では、はじめ！」

千冬さんの号令と共に飛翔した鈴たち。それを一組の副担さん——山田先生が追いかける。

甲龍、ブルー・ティアーズ対ラファール・リヴィアイヴ。生徒対教師のI.S戦闘、その実演が始まった。

「手加減はしませんわ！」

「手を抜くんじやないわよ！」

「い、行きます！」

強気な二人に対して、控えめな調子の山田先生。

僕は詳しく知らないのでなんとも言えないけれど、千冬さんが対戦相手に先生を紹介した時、列の中から少なくない驚きの声があがつていたから、普段は千冬さんのようなバリバリの武闘派つて感じじやないのかな。

千冬さんが言うには、山田先生も元代表候補生だったのだそう。ちなみに鈴も代表候補生。なら先生も強いんだ、きっと。

「鈴、頑張れ」

だからといって、鈴が負けるとは思わない。

生徒組は自然と鈴が前衛、オルコットさんが後衛の手堅いフォー

メーションを組み立てて、山田先生に先制攻撃を仕掛ける。

鈴が一対の大型ブレードで目眩しを兼ねた攻撃を繰り出し、背後から狙うオルコットさんの射線を紙一重で通す。というか通している。山田先生には惜しいところで避けられてしまつてるけど。

「さて、今の間に……そうだな。ちようどいい。デュノア、山田先生が使つているI-Sの解説をしてみせろ」

「あつ、はい」

圧巻の空中戦を観戦しながら、僕もシャールルの話に耳を傾ける。リヴィアイヴのことはあまりよくわかつてないから、ちようどいい機会だ。

「山田先生の使用されているI-Sは『デュノア社製『ラファール・リヴィアイヴ』です。第二世代開発最後期の機体ですが、そのスペックは初期第三世代型にも劣らないもので、安定した性能と高い汎用性、豊富な後付武装が特徴の機体です』

衝撃砲を起点にして格闘戦へ持ち込もうとする鈴を、山田先生は手を替え品を替え突き放す。なるほど、道理で純粹な手数が鈴たちよりも多いんだな。スペックが高いと言うだけあって、逃げ足もそこそこ早い。

「現在配備されている量産型I-Sの中では最後発でありながら世界第三位のシェアを持ち、七カ国でライセンス生産、また十二カ国で制式採用されています。特筆すべきはその操縦の簡易性で、それによつて操縦者を選ばないことと多様性役割切り替えも両立しています」

言われてみれば、山田先生は相手との距離によつてアサルトライフルやショットガン、盾に切り替えて応戦している。

主に射程距離のない鈴から逃げつつ、接近戦に不慣れなオルコットさんを先に落とそうとしているように見えた。

比較的低燃費な鈴にはまだ余裕がありそうだけど、オルコットさんのビット兵器は随分前に動かなくなつていて。多分ガス欠かな。第三世代型の特殊兵器はどれも燃費が悪いんだ。

「豊富な選択肢、装備によつて格闘・射撃・防御といった全てのタイプに切り替えが可能で、参加サードパーティが多い事でも知られていい

ます

「ああ、いつたんそこまででいい。……見ろ」

山田先生がオルコットさんを射撃で誘導、鈴にぶつけたところでグレネードランチャーを取り出し、二人に擲弾を撃ち込む。

「鈴……」

予想外の衝突に目を見開く鈴。

けれど即座に左腕を前に突き出し、擲弾を腕の小型衝撃砲で迎撃。二人の目と鼻の先で爆発が起ころる。

キュイイイインツ——!!!

一拍置き、突然煙の中から飛び出してきた鈴が山田先生に斬り掛けた。

「瞬時加速……！」

一夏が呑いた通り、今のは正しくクラス対抗戦で一夏が披露した瞬時加速だつた。鈴も使えるようになつてたんだ。

「——」

「あああああ——ツ!!」

鈴の不意打ちは功を奏し、連結したブレードの刃が山田先生をしつかり捉える——も、

「……つち、あたしの負けか」

寸前でびたりと止まり、悔しそうに白旗をあげる鈴の後ろで、オルコットさんが地面に落ちた。

先の爆発により、オルコットさんには撃墜判定が降りたらしい。

まだ動けるんだから粘つてもよさそうなものなんだけど、それでも鈴が降参したので今回の実演は山田先生の勝利ということで終了。鈴がまとっていた、鬼神じみたオーラはどこかへ散つた。

「……お見事でした。完敗です……」

「は、はいっ、恐縮です……」

山田先生に軽く頭を下げ、甲龍を解除して列に戻ってきた鈴を出迎える。

こういう時は下手に話しかけることはしないで、黙つて寄り添う方がいい。

「…………」

「…………ありがとう」

僕の判断は間違つていなかつたようで、ほどなくして鈴に笑顔が戻つてきた。

こつちに寄せてきたのか、二の腕に鈴の頭が触れた。

「さて、これで諸君にもI-S学園教員の実力は理解できただろう。以後は敬意を持つて接するように」

ぱんぱんと手を叩く千冬さん。

「専用機持ちは織斑、オルコット、デュノア、ボーデヴィイツヒ、凰、宮田だな。では六～七人グループになつて実習を行う。各グループリーダーは専用機持ちがやること。いいな？ では分かれろ」

千冬さんが言葉を切ると同時に一夏やシャルル、鈴と僕に向かって大きな人の流れが生まれる。

二クラス分の人間が、僕らに押し寄せてきたのだ。

「織斑くん、一緒に頑張ろう！」

「デュノアくんの操縦技術を見たいなあ」

「凰さんも格好よかつたよ、さすが代表候補生！」

「み、宮田くん、よろしくね！」

「ね、ね、私もいいよね？ 同じグループにいれて！」

なんだろう、女の子にここまで詰められたことがなかつたからかな。キャピキャピした圧にちよつぴり困つてしまふ。鈴も同じく、戸惑つてゐるみたいだつた。

この状況を見かねたのか、それとも一夏のSOSを受信したのか、難しい顔をした千冬さんが重たいため息をつく。

「この馬鹿どもが……。出席番号順に一人ずつ各グループに入れ！ 順番はさつき言つた通り。次にもたつくようなら今日はI-Sを背負つてグラウンドを百周させるからな！」

おお、これが鬼のちーちゃん……。千冬さんの低い声を聞いて、女の子たちはさつきと各自のグループに散つて整列まで済ませてしまつた。

「最初からそうしろ。馬鹿どもが」

苦労が透けて見えるから、あんまりバカつて人に言っちゃいけないんだよとまではさすがに言えない。

そんな千冬さんの様子を伺いながら、各グループの女の子たちがひそひそとお喋りしているのが聞こえてくる。

「……やつたあ。織斑くんと同じ班つ。名字のおかげねつ……」

「……うー、セシリアかあ……。さつきボロ負けしてたし。はあ……」

「……デュノアくん！ わからないうことがあつたら何でも聞いてね！」

ちなみに私はフリーだよ！ ……」

「……凰さん、よろしくね。あとで専用機の話聞かせてよつ……」

「……宮田くんがこんなに近くにいるなんて……。わ、

私も話しかけてもらえたりするのかな？ ……」

「……」

ふと、静かなグループがあることに気付いた。

そこだけが冷ややかな空氣と、重たい雰囲気に包まれている。グループの女の子たちの表情も暗い。まさに貧乏くじを引かされたとでも言いたげな顔。

その中心にいるグルーープリーダー、千冬さんがボー・デ・ヴィ・ツヒと呼んでいた子は、

「クロエ……」

僕の娘ということになつてている女の子に、どこか似ているような気がした。

「み、宮田くんどうかしたの？」

「……ん、なんでもない」

誤魔化すように右手で目をこする。

どこがと訊かれると返しに困るけれど、雰囲気がどことなく。よく見たら全然似てないし……。

親バカと言われても構わないし、どうだつていいけれど。これだけは言わせてもらおう。クロエは可愛いのだ。

親の顎頬目に見ても頑張り屋で、努力家で。僕を父さんと呼んで花のようないい笑顔を向けてくれる。ちよつぴり不器用なのもまたプラスに働いてるのでいい。

(……気のせいかな)

他人の空似ということもある。なにせ、世界には同じ顔の人間が二・三人はいるという話なんだから。

このことはもう忘れて、今は授業に集中しよう。

「ええと、いいですかー皆さん。これから訓練機を各グループ一体取りに来てください。数は『打鉄』と『リヴァイヴ』が三機ずつです。好きな方をグループで決めてくださいね。あ、早い者勝ちですよー」と、リヴァイヴを降りた山田先生が指示を出した。

自分のグループにどれがいいか訊く前に、他のグループの様子が目に入ってくる。というか一夏のグループがね。篝、一夏の足を踵で踏むのはダメだよ。僕はオルコットさんも応援してるんだからね……。

(でも心配だな)

一夏はなんとか歩み寄ろうとしてるみたいなんだけど、篝が意固地になつてると他の子の押ししが強いのもあつてなかなか上手くいつてないみたいだ。

この様子から見るに、二人は昨日の内に仲直りできなかつたんだろうな。

(世話の焼ける幼なじみたちだ……)

と、そんな具合でよそのグループにも目を向けながら、僕は自分のグループのことも進行させていく。

「早い者勝ち。……どうしたい?」

「え、えと……どう、おうしようかな……」

「あ、あんたテンパりすぎよ……」

「……そつちこそ、震えてるじやん」

「これは武者震い!」

ええと、僕は打鉄とリヴァイヴのどつちがいいのか訊いてるんだけど……。

なかなか話がまとまらず、結果的に出遅れた僕らは残された打鉄を使うことになつた。

各班長は訓練機の装着を手伝つてあげてください。全員にやつても

らうので、設定でファイットティングとパーソナライズは切つてあります。とりあえず午前中は動かすところまでやってくださいね』

山田先生の指示に従い、さつそく僕のグループも訓練機を動かすところからはじめることに。

するとシャルルのグループから、

スパーーン――！

「痛いっ！」と悲鳴が聞こえてくる。変なことしてた女の子たちが、修羅と化した千冬さんに叩かれたらしい。

わちやわちやしてるのを見て、似たようなことしてた一夏のグループの子たちもピシッと授業に集中しはじめた。

(つと、見てる場合じゃなくて……)

いい加減始めとかないと、僕のグループだけ時間までに終わらないかもしねれない。放課後居残りはしたくないし、てきぱきやつていこう。

「……最初は誰？」

こういう時は番号順がいいんだろうけど、生憎この中の誰がどんな名前なのか僕は知らない。

「は、はい！」

と、元気よく出てきた女の子を運んできた打鉄の前に連れていく。
「まず装着と起動。歩行も軽く、簡単な往復を」

「わ、わかった。やつてみるね……」

別にそこまで難しいことをこれからしようとしてるわけでもないのに、女の子は緊張した面持ちで頷いた。

「焦らなくていい。ゆっくり、着実に」「はう……う、うん！」

I Sに乗ること自体は授業で何回かやつているはずなので、よほどのことがなければ装着と起動までは全員問題なくこなせるはず。「で、できた！」

「よくできました。じゃあ次は少し歩いてみよう。さあ、いち、に……」

「い、いち、に……」

「……そう、その調子……」

「こんな具合で一人、二人、三人と次々済ませていく。

「……ね、ねえどうだつた? ……」

「……す、すごい……。み、耳の奥が溶けちゃうかと思つた……」

「……距離感がえつちすぎる。男女の壁を容易に越えてくるのズルい

……」

「……お、降りる時に手を握つてもらつちゃつた……」

終わつた子からひそひそ話をしてるけど、今のところ千冬さんから私語を咎めるような視線は飛んできていない。

「次の人、準備してて」

「は、はい!」

……こんな感じで。僕のグループでは特に問題が発生することもなく、月曜日の午前は平和に過ぎていった。

「織斑くんの班、織斑くんにお姫様抱っこで訓練機に乗せてもらつてる……いいなあ……」

「あつ、こらやめなよ」

「うちはうち、よそはよそ!」

「授業とはいえ、宮田くんと会話できるなんて滅多にないチャンスなんだよ。絶対に織斑くんのお姫様抱っこより貴重なんだから……」

「深窓の佳人の異名は伊達じやないのよ!」

「……そもそもあそこの真似して、どうやつて宮田くんにお姫様抱っこしてもうつもりなのさ?」

「「「ああ……」」